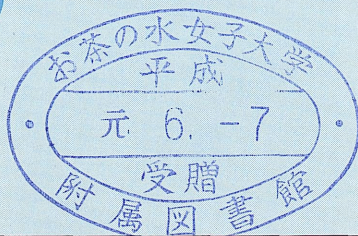


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1989 7



第88巻 第7号 日本幼稚園協会

幼稚園教育要領



文部省告示「幼稚園教育要領」改訂版で、幼稚園教育の基本的な精神が示されたもの。実施日は平成2年4月より

幼稚園から高校まで同時改訂公表され、教育のはじめは幼稚園からと幼稚園教育が位置づけられた。

改訂版は遊びを通して人や自然と関わる力を培い子どもの発達に即した教育の必要が示された。人間として生きるための幼児期の教育内容が明らかになり、教育哲学が確立されたこと。

保育関係者必携の書である。

A5判・16頁・定価100円(本体97円)

幼稚園教育要領解説

A5判・224頁

定価1,200円(本体1,165円)

大場牧夫・高杉自子・森上史朗 共編著

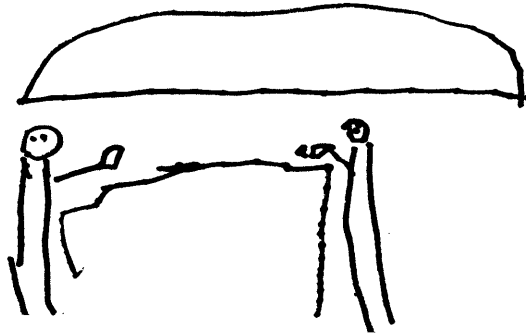
教育要領改訂の理由? 「総合的」とは? 「領域」とは? などなど、教育要領の各項目について、明快な説明と、考え方の基本がのべられています。

また、著者以外の協力委員による補足の話し合いもつけられて、よりわかりやすい内容となっています。

目次から

- 第1章 幼稚園教育要領はなぜ変わるのか
- 第2章 どんなふうに変わるのか
—考え方の基本—
- 第3章 幼稚園教育の内容
- 第4章 これからの幼稚園教育を計画し実践するために
- 付録 「幼稚園教育要領」全文

幼 児 の 教 育



第88卷 第7号

幼児の教育 目次

— 第八十八卷 第七号 —

© 1989

△巻頭言▽

世界に恥じない日本の幼稚園……………小塩 節…(4)

夜昼寝起きしているうちに……………津守 真…(6)

特集・食

栄養と食文化……………島田 淳子…(10)

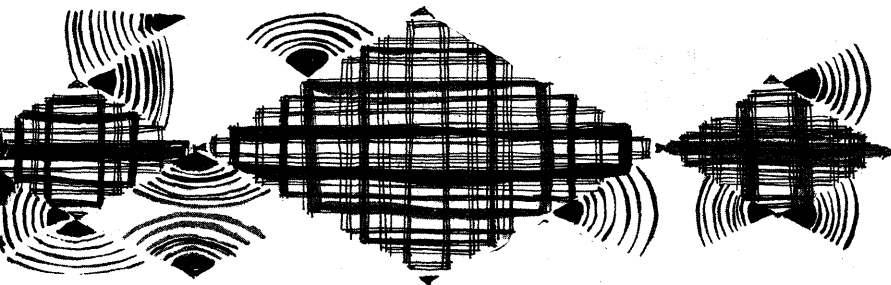
食品の微生物汚染……………諸角 聖…(12)

「食べる」楽しみ・喜びを子ども達に……………上坂元絵理…(15)

昆虫と食物……………小島 賢司…(17)

家庭科からみた「食」……………橋本 都…(19)

保育の原点としての「共生」……………嶺村 法子…(22)



イメージ画にみる母子関係 その2

いく母とおいかける私……………やまだようこ……………(30)

昔話の一考察

女性の心の内的成長について……………小野 瑞江……………(38)

子どもにとって楽しい音楽リズムのあり方を考える(2)……………原口 純子……………(49)

若いお母さんたちへ

気分を変えるということ……………宮里 暁美……………(56)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

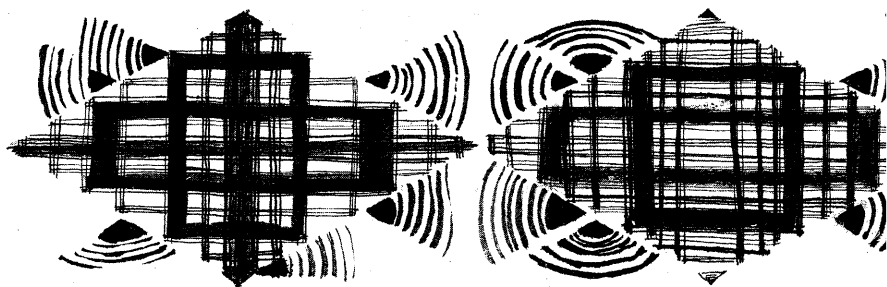
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



世界に恥じない日本の幼稚園

小塩 節

過ぐる三月の末、私のつとめている幼稚園の卒園式に西ドイツからのお客さんがとび入りの来賓で出席しました。ボン大学の若い美人のドクターです。近くの小学校の校長先生も来てくださり、並んですわって幼稚園の子どもたちの門出を祝ってくれました。

式のあとでそのドイツのドクターが、心底驚いたと感想を述べたのは、第一に、百人もの卒園生が実に整然としていることであり（ヨーロッパの幼稚園や小学校には入学式も卒業式もありません。何となく始まり、何となく終わるのです）、第二には、式のおわりに子どもたちが式場からひとりひとり出ていくときに、親たちばかりか担任の先生たちが涙をこぼして泣

いている。これにはほんとうにびっくりした。なぜ日本人はこんなうれしいときに泣くのか。手を打つてよろこばばいいではないか——、そう言うのでした。この感想には私の方が驚きました。

第一の点について、幼稚園や小学校は一種の学園共同体であって、遊ぶときは徹底して遊ぶが、団体行動をするときには一瞬整然となるけじめが大切なのである。ただし、いまも東ヨーロッパ諸国のように幼稚園のときから軍事教練をするなどということは、日本では全くありえないと答えました。

第二の点、つまり親も先生も（実は園長も）このうれしいときになぜ泣いたのか、ということですが、こ

れは幼児の成長への感動であり、別れの涙なのだ、幼
き者の門出のはれやかさへのよるこびの涙だ。タバコ
を喫いながら保育をしているドイツの幼稚園の先生を
私はたくさん見たが、日本の先生たちはもっと真剣な
のだ——、そう説明してあげました。

外国人から見た日本の幼児教育は、もともとドイツ
人のキュックリヒ先生などの影響が強くなってそう異
質ではないはずなのですが、根本的な文化や国民性の
ちがいはここにもはっきりあらわれてきて、お互いに
驚くことが多くあります。この一点についてだけでも
一冊の報告書ができるくらいです。

実は私は昨年まで三年間、幼稚園と大学の勤務を休
職にしていただいて、駐西ドイツ大使館公使として赴
任し、ケルンの日本文化会館館長をつとめてきまし
た。職務上、ヨーロッパ人が日本をどう見ているかと
いう情報がたくさん入ってきます。残念ながら誤解や
偏見がとても多い。それを打破し、論破し、ほんとう

の日本の姿を伝えることが私の職務でした。

日本の幼児教育についてヨーロッパ人は、「大学受
験の予備校であり、個性を殺す集団ロボット人間の製
造」という考え方をしています。ここ数十年にわたっ
て特派員や旅行者たちがそう伝えてきたのです。この
偏見をぶち破るのはたいへんでした。

日本の大都會では出生率の低下とともに、園児獲得
のために受験予備校的な売名幼稚園があることはたし
かです。でも、さいわいにその数は減りつつありま
す。幼稚園で算数、英語、漢字を習った子が小学校に進
み、精神的好奇心を失ってダメになっていく、あまり
に当然の姿がわかってきたからです。全人格的発達
が、集団の遊びの中で豊かにつちかわれていく。そう
いう日本のよき幼児教育の実相を私は懸命に伝えてき
ましたし、これからも世界の人がとに示してあげたい
と思っています。

(東京都杉並・ひこばえ幼稚園)

夜昼寝起きしているうちに

津守 真

ことしも、私共の養護学校は五人の卒業生を地域の養護学校の中等部に送り出した。子どもによっては二、三歳のときから来ているから、小学部六年生を卒業するまでに十年間も通ってきたことになる。幼児のころには、さががどうなるか見当がつかなかった子どもたちが、この頃になるとそれなりに落ち着きができている。私はひとりひとりの子どもがこの年月のことを思い浮かべながら、イエスの「成長する種のたとえ」を引いて卒業式のはなしをした。それは次の箇所である。

「神の国は次のようなものである。人が土に種をまいて、夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりで実を結ばせるのであり……」（マルコ、四章）

七、八年前、どの子どもも大変な時期を過ごしていた。発作のひどかったある子どもは、夜泣きしない日はなく、ひるまも機嫌悪くむずかり、自分の手をかみ、どう過ごして

よいか分からなかった。大声を出すので、家でもまわりの人たちにきがねして、しかも母親のやり方がわるいと皆から非難されていた。そのころは学校でも、どうやっても機嫌がなおらないことがしばしばだった。

ある子どもは職員の肩の上のって一日中を過ごし、笑うことをしなかった。ある時期にはくる日もくる日も、水ばかりやっていた。遠くから通ってくるのに、水遊びをしにくるだけで申し訳なく思った時もあった。一日中おんぶして過ごし、それでいいのかと疑問に思った時期もあった。いつのまにか、その子どもはいつもにこにここと笑顔で、だれからも可愛がられる貴公子になっていた。

こういう日々を、夜昼寝起きして過ごすうちに、種は芽を出して成長した。

成長とは、大人に具合がいいように変化することをいうのではない。その子自身が、自分から何かをするようになり、自分で遊べるようになり、自分の人生を自分らしく形成するようになることである。

それには、家庭と学校とが一緒になって、そのたいへんな日々をもちこたえ、子どもが自分で何かをやったと思える毎日をつくり出し、大人も何かを子どもと一緒にやったと思える日を生き、そうやって過ごしてきた。

このあいだ、毎月の懇談会するとき、今度卒業するひとりの子どもの母親がこんなことを

話した。以前はこの学校の卒業のときがきたらどうしようとおそれていたが、いまはこわくない。子どもと一緒に毎日をつくってゆける自信があるというのである。私はこのことをうれしく思った。私共の学校は小学部までしかない。とくに障害をもった子どもと親にとっては将来は重くのしかかっている。障害者を仲間に入れてくれないこの社会では、ことにそうである。このことを承知しながら、また具体的にはわからないことばかりなのに、この子どもと一緒に、他の人たちを含めて、毎日の生活を明るくつくってゆける自信があるという。

発作をもった子どもの発作がよくなったとはかならずしも云えない。学校は発作を治すことはできないかもしれない。しかし、学校は、子どもが発作を起こしながらも、自分で生活する場をつくることはできる。その子どもは、あるとき、発作を起こしたあと、いまま頭の内部で起こった奇妙なことは何だったのかというように、自分の頭を壁にぶつけてためていた。むしろあるときには身体を支えるだけで大変なこの子どもと毎日をつき合っている職員や実習生との日々がなければ、発作を起こしている自分を意識するほどに、この子の自我は育たなかつたろうと思う。その毎日の中にたいせつなものがある。卒業式にあたって、私はこういう趣旨のことを話した。

「夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、そ

の人は知らない。」あとになってみると、能力は伸び、落ち着きもでき、生活もらくにな
って成長していることが認識される。しかし、そうなるまでの毎日の生活の中では、成長
は目に見えない。

夜になると寝て、朝起きるといっただけで、子どもによっては大変である。そして、昼間
の時間を毎日どう過ごすか。「夜昼寝起きしているうちに」という一行の中に、何と多く
のことが含まれていることか。その毎日を、子どもを育てる大人自身がどう過ごすのか。
日々私共に問われている。

(愛育養護学校)



栄養と食文化

島田 淳子

私は大学の家政学部に籍を置き、食物学の教育と研究にたずさわっている者です。今回思いがけず本誌に寄稿させて頂くことになり、何となし夢の感じられる表紙の絵を見ておりましたら、今はもう成人した二人の娘の幼児時代が懐しく思い出されて参りました。夕方息せき切って帰宅した私に、目を輝やかせて報告してくれる毎日の遊びの何と創造性に満ちていることよと感動したこと、そうは思っても塾などへ行つて勉強しているよそのお子さんを思つてひそかに悩んだこと

など、昨日のことのように鮮やかに思い出されます。

私が毎日の食生活の中でもっとも気をつけたことは、もちろん栄養的なバランスでした。子どもの成長に必要な栄養素は全て食物から摂取しなければならぬことは私がここで申すまでもないことでして、アミノ酸バランスの良い蛋白質やビタミン、ミネラルなどの充足した食生活を子供たちに持たせるのは保育者としての務めであらうと思われます。

そこで栄養のバランスの面から、現在の日本人の食



生活を考えてみたいと思います。

日本人の食生活は第二次世界大戦後急速に欧風化され、肉類、乳製品などの消費量が伸びてきました。これに伴って日本人の身長も前よりずっと高くなってきたことは周知の事実であります。しかし、完全に欧風化されたのではなく、長い歴史の中で日本人が育ててきた食生活に欧風料理や中国料理が混合し、世界の中でも特徴のある新しい日本型食生活ができました。

この特徴は一人当りの国民所得と供給栄養量との関係でみますと大変にはっきり致します。すなわち、日本人の一人当りの摂取カロリーは、同じように所得の高い欧米先進国に比べて著しく低く、でん粉質のカロリーの比率は高く、動物性蛋白質の比率は低いことが知られています。このことから、蛋白質と脂肪と炭水化物の熱量比がちょうど良い状態になっているのが特徴です。

欧米諸国では現在、砂糖、脂肪、動物性蛋白質などの取り過ぎから来る肥満およびそれに伴う成人病に悩

んでおり、日本型食生活を見習おうとする傾向にあります。

このような食生活が定着した背景にあるのは日本の気候風土です。四方を海に囲まれ、四季の変化に富む我が国では昔から豊かな海の幸、山の幸に恵まれました。そして日本人の繊細な感性はこれらの種々の素材を生かした料理を創り出してきました。春の訪れと共に食卓を飾る筍、うど、蕨などは最近注目されているダイエタリーファイバーの給源としても秀れている素材です。肉類と共に過剰のコレステロールも摂取してしまいう欧米型食生活とくらべると液状脂質を含む魚を上手に利用する日本型食生活の利点は一目瞭然です。

日本古来の食文化に外来の食を加え、渾然一体となった現在の日本型食生活を私たちは次代の日本人にぜひ伝承したいものと思います。

幼児期の食生活は、この意味で大変重要です。一度形成された食の嗜好や食習慣を変えることはなかなか

むつかしいからです。これについては、幼い程、また男性より女性の方が新しい食習慣を身につけやすかったとの実験報告がありますが、このような実験を待たなくても、誰しもが感じることはないでしょうか。

食品の微生物汚染

近年の食品製造・包装技術の目ざましい進歩はレトルト食品などの無菌食品を数多く生み出しました。しかし、食品全体からみれば、このような技術の応用可能なものはまだ一部に過ぎず、生鮮食品をはじめ市販食品の多くは多種多様な微生物により汚染されています。食品中には人間の生命を維持し、健康を保つために不可欠な栄養素が存在しますが、それらは同時に食品を汚染しているカビや細菌などの微生物の増殖にも

栄養の充足と食文化の伝承との二面から、幼児の食生活を大切にしてほしいと心より願っております。

(お茶の水女子大学)

諸角 聖

最適な栄養源になります。すなわち、食品中の微生物は、環境条件(温度、水分、pHなど)さえ適当であればいつでも増殖可能なわけです。しかし、食品が微生物の生育可能な環境条件に置かれても、実際には汚染微生物のすべてが増殖するわけではなく、多くは一部の微生物の増殖によって食品は悪変し、腐敗・変質が起こります。もし、食品の悪変が病原菌によって起きた場合には食中毒などの食性疾患の原因となりま

す。では、食品を介して起きる疾患とはどのようなものでしょうか。

細菌性食中毒・食品中で増殖した微生物や、食品に含まれる有害な化学物質の摂取によって引き起こされる健康障害が食中毒です。しかし、飲食物が原因であっても寄生虫症や伝染病、食品中に混入した金属などの異物に起因する疾患を食中毒とは言いません。食中毒の九五%以上は細菌性のもので、その原因菌は一〇種以上知られており、中毒発症の形式から感染型と毒素型とに分けられています。

感染型食中毒を起こす菌のうちで主なものは、腸炎ビブリオ、サルモネラ、病原性大腸菌や新顔のカンピロバクターです。食品中で増殖したこれらの菌が食品と一緒に摂取され、腸管に到達するとそこで増殖し、毒素を産生したり腸管の上皮細胞中に侵入して約一〇〜二四時間後に嘔吐、下痢などの胃腸炎を発症させます。一般に、これらの菌の感染成立には一〇〇万個以上の菌量が必要と言われており、もちろん伝染病のよ

うに人から人へ直接伝染することはありませんし、仮に食品が食中毒菌に汚染されていても、増殖がなく、菌量がわずかな場合には食べても食中毒になりません。

一方、毒素型中毒は菌そのものではなく食品中で菌が増殖したとき産生された毒素が中毒の原因となるもので、いったん食品中に毒素が産生されると、その後の調理で菌が死滅しても中毒を発症します。先年カラシ蓮根事件で話題になったポツリヌス中毒と黄色ブドウ球菌食中毒がこのタイプです。また、腐敗で生じたヒスタミンなどの有害物質による中毒を腐敗中毒と呼びますが、これも毒素型食中毒の一つと言えるかも知れません。

ところで、「食中毒予防の三原則」という言葉をご存じですか？「つけない」手指、調理器具、食器類の清浄化を心がけ、微生物を媒介するゴキブリ、鼠の駆除を励行し、食品に病原菌をつけない。「ふやさない」微生物の繁殖しにくい環境で食品を保存する。

「殺す」加熱調理などで殺菌する。……と、いかにも簡単そうですが、手指についての菌は水洗いだけでは簡単に落ちませんし、腸炎ビブリオは夏の海水中に、黄色ブドウ球菌は鼻、皮膚などに広く存在するため、食品への汚染を防止することは困難です。また、一度に多量に作る給食や仕出し弁当、店頭で長時間陳列された生鮮食品などは、喫食までに時間がかかるため、汚染菌が繁殖することが多く、食中毒の原因となりやすいのです。

カビ食中毒症…カビも食中毒の原因になります。麦に寄生する麦角菌や赤カビ病菌による食中毒は古くから知られています。カビが食品上で増殖するとそこで二次代謝産物を産生します。そのうちの有害な物質をカビ毒（マイコトキシン）と呼んでいます。このカビ毒を食品と共に摂取することによって起きるのがカビ食中毒です。輸入ピーナッツなどから検出され、新聞報道などで騒がれるアフラトキシンは現在知られている最も強い発ガン物質です。カビ毒は一〇〇種以上知

られており、それを生産する菌もまた多種に及んでいます。毒素を生産するカビとそうでないものとの鑑別が非常に難しいことを考えると、「カビの生えた食品は食べない」と割り切った方が賢明でしょう。

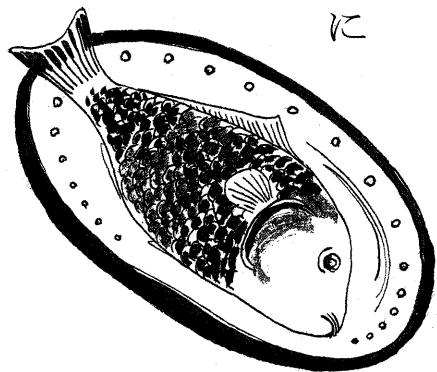
消化器系伝染病…経口伝染病とも呼ばれ、水や食品を介して、あるいは人から人へ直接伝染して流行します。赤痢、腸チフス、コレラなどが代表的な病気ですが、幸いなことに、わが国では近年発生が著しく減少しました。しかし、東南アジア、アフリカの発展途上国ではいまだに猛威をふるっています。海外旅行先での生水と生鮮食品は要注意です。

微生物の悪さばかりを列記してしまいました。しかし、微生物は発酵とか醸造といった形で食品製造に広く応用され、古来から人と仲良くつきあってきたことも忘れてはならない一面でしょう。

（東京都立衛生研究所）

「食べる」楽しみ・喜びを子ども達に

上坂元 絵里



三歳児のはじめてのおべんとうの日は、登園した途端に、「お腹が空いちやった。」「もう、お弁当?」と矢の催促で、しまいには勝手にバスケットを持ち出してお弁当のふたをあけていたりということもしばしばである。

「この子は、ほんとうに食べることに執着がないんです。」とお母様がなげいていたA子ちゃんが「どうしてお弁当ってこんななおいしいのかしらねえ。」と隣りの子どもに語りかけるほほえましい光景を目にしたこともある。

私のクラスでは、お弁当は絶対に残さないという約束はない。できるだけ食べ物を大切に食して欲しいという思いを懸命に伝える努力はするが、食べることが負担に感じられるようになって欲しくないと思うからだ。

それでも、C男がおかずの一つを友だちにあげて「これは僕が食べたことにするから、お母さんにB君にあげたって言わないでね。」と話すのを耳にして考

えさせられたこともある。「全部きれいに食べられて偉かったわね。」という母の賞賛を得たいがためだったと思うが、母とも話し合い、本人に残してもいいこと、あるいはお友だちにあげたことを母に話すようにと伝えた。

幼稚園のおべんとうという場面からみてもよく食べる子と、食べさせるのに手のかかる子との個人差はとても大きい。母親にとって、何でもよく食べてくれる子と、工夫して調理しても余り食べない子と、苦労が随分違うことだろうと感じる。食べる力は、生活全般あるいは知的な面での吸収力と比例するように言われることがある。確かに外への興味をたくさん持ちいろいろな学んでいく力は、食べる力ともあらわれるように思う。そこで、幼稚園でなかなかおべんとうを残さずに食べられない子どもは、生活の中で充分に自分を發揮できていないのかと悩むこともある。しかし、逆の見方をするならば、子どもがのびやかにそしていきいきと生活しているのなら、その子が食べ

ているものが今は充分でありふさわしいと考えられるかもしれない。飽食の時代に生きてみると、日に三度豊かな食事をとることが標準のように考えてしまいがちだが、食べすぎることは、他の物をとり込む力を残さないことにつながるのかもしれない。

幼稚園の生活にもだいふ慣れてきた二学期のある日、おべんとうにしようと思う時刻に保育室には三枚のござが敷かれ大きな家ができていた。どうしても片付けたくないというT君、それでは今日は皆でおへやのござの上でお弁当を食べましょうと提案してみる。木床の上にござでは、あまり座り心地はよくないが、子ども達は大いにはしゃいで支度をした。いただきますすの時にふと思いついて「さあ、今日は森の中へピクニックに来ました。それでは、いただきます。」とお弁当を食べ始める。「あら、リスさんがきたわ。」と私が言うと、ふだん妙に大人びたことを言うC男やS子が「あっ熊もきた。」「小鳥さんも飛んでる。」などと思いがけずのってきた。いすに腰かけて食べる時より

も、皆で一諸に食べる感じがしてとても楽しいお弁当だった。

二月の終わりの、まだ戸外でお弁当を食べるには少し寒い日にもごさを敷いて食べたことがある。その時は電車大好きのお君の思いついた新幹線の食堂車ということだった。

昆虫と食物

小島 賢司

昆虫の仲間には世界中に一〇〇万種類以上いるといわれており、動物全体の種類数の八〇%近くを占めています。その個体数となると天文学的な数字になってしまい、とても数えることなどできません。地球はま

食することは、人生の大きな部分を占める。そして食べる力は生きる力であるとも言えよう。食べることを大切に、楽しみ、喜びや満足を得られる子ども達でいて欲しいと思います。そのことは人生をそのように生きられる事にもつながると思うから。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



に昆虫の星といえます。

なぜ、こんなに多くの昆虫がすんでいるのでしょうか。昆虫の体はとても小さく、空を飛んで移動することができません。体が小さいということは、狭い範囲に沢山すめるということになり、また、食物（餌）も少しの量で生育することができず、それから食性が広いことも理由の一つに挙げられます。

昆虫は鉱物以外は何でも食べるといっても過言ではありません。とはいっても一種類の昆虫が何でも食べられる訳ではなく、種類ごとにその餌は決まっています。昆虫の餌は大別すると動物食・植物食・雑食とに分けられます。

動物食の昆虫といっても餌の好みや食べ方にはいろいろあり、カマキリは生きた昆虫を捕えて食べ、水中生活のタガメは小魚などの小動物を捕えて針のような口で体液を吸ってしまいます。シデムシは動物の死骸に群がり、奇麗に食べてしまう死肉専門の森の掃除屋です。カツオブシムシの幼虫は乾燥した動物質を好ん

で食べるため、貯蔵食料や衣類の害虫として有名です。中にはマイマイカブリのように幼虫も成虫もカタツムリを専門に食べる偏食家もいます。

植物食の昆虫には偏食家が多く決まった植物しか食べないものがあります。よく知られているモンシロチョウはアブラナ科の植物しか食べませんが、それは、この植物に含まれるカラシ油が食性を決める決め手になっているからです。植物にはその種類独特の科学物質を含んでいるものがありますが、これは元々植物が昆虫から食べられないために植物体内に昆虫の嫌うような物質を合成したものです。そのうちに昆虫のほうもこれに抵抗するものができ、食べ続けるうちにその物質に対して、逆に嗜好性をもつようになります。このようにして昆虫と植物の長い歴史の中から食草が決められてきたようです。マダラチョウの仲間には毒草を食草として育ち、その成分を体内に取り入れるものがあります。この蝶を鳥が食べると嘔吐して苦しみ、二度と同じ種類の蝶を食べなくなります。このように身を

守るために巧みに食草を利用して昆虫さえあります。ハムシの仲間には決まった植物しか食べないものも多く、ウリハムシ・イタドリハムシ・ヤナギハムシ・ヨモギハムシなど、その食草から名前のついた種類が沢山あります。

雑食の代表は何といってもゴキブリでしょう。家にすみつくゴキブリ類は人間の食べるものなら何でも食べてしまいそうです。この他にも動物の糞を食べる食糞性の昆虫や、寄生生活をする昆虫など、変わった食性のものを取り上げたらきりがありません。

私の務める昆虫館では七〇種類程の昆虫を飼育展示

家庭科から見た「食」

橋本 都

していますが、すべての昆虫の好む餌を用意することは大変なので、新鮮な植物を餌にする昆虫以外は代用食を考えて与えています。一番多くの種類に利用しているのがリンゴです。その他豚肉・ニボシ・固型飼料などを必要に応じて与えています。昆虫を飼育するにはその食物を知ることから始めなければなりません。

最近、地球規模の環境破壊が問題にされていますが、地球が酸素のない無機質な星にならない限り、昆虫たちはいつまでも生き続けて行くことでしょう。

(豊島園昆虫館)

現在、高校生たちは、どのような食生活をおくっているのだろうか。私は家庭科教師としてクラス担任として高校生と接してきたが、高校生の食生活も、社会の様相とあいまって大きく変化し、いろいろな問題を内包しているようにみえる。

食生活の授業では、まず自分の食事に注目させてみる。「昨夜食べたものをノートに書き、栄養診断する」という課題にも、食べたものを思い出せる生徒は少なくなっている。いつも食べているのに、その食品の名を知らないなど食事への関心も薄い。また食べていないという生徒は朝食も抜いたりする。

食事の時間も、家族と共にということではなくなっている。高校生の下校時間は様々で、部活動で遅くなり、帰りがけにジュースや袋菓子を食べ、九時過ぎにやっと食事となる生徒もいる。急激な運動のあとにアイスクリューや飲物をとるものだから、結局家では、夕食をきちんと食べられない。夜遅くなってからインスタントめんやポテトチップの類をとり、朝は食

欲がないという繰り返しである。

また、最近では、下校途中の駅でパンやおにぎりをほおばって空腹をしのぎ、塾へ直行する者も多い。

一週間ほど食事記録をつけさせてみると、その粗末な内容に驚くばかりである。ファーストフードや菓子などで辛うじてカロリーを維持している有様である。

さらに痩せたいために異常なほどの食事制限をしてみたり、太りたくても太れず貧血で半年も月経がなくなっている生徒もいるなど、ただ単に食べることだけでは片付かない問題を感じている。

調理実習や調理実験は大抵の生徒が好きである。しかし、実習は張りきってやるのに、いざ試食となると、肉も魚も卵も、人参もネギもほとんどの野菜も嫌いで、毎日何を食べて生きているのだろうと思われる生徒もいる。

手作りの本物の味と化学調味料を使った加工食品の味と味覚テストをすると、加工食品をおいしいとするものが年々多くなっているようで、家庭科教師として

虚しい気持ちになる。

従来、日本人は「食」を大切にしてきた。家族揃って母親らの手料理を食べることが、家庭そのものを形成していく大きな要素であった。その味はその家ならではの味であろし、食事作りは家族への愛情に支えられた行為であったろう。

それが今や、家族の生活時間がバラバラで「食」についての価値観も多様となり、食事は単なる飢えを満たすものになっているのではないだろうか。

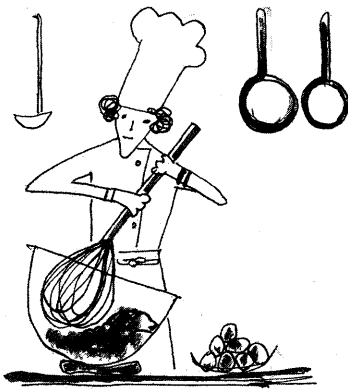
授業をすすめていくうち、生徒もやはりこのままではいけないと思ってきたようである。

夏休みに、自分で食事を作るという課題を出した。調理実習の時、いつも包丁の扱いにハラハラさせられる生徒がいたが、その生徒の母親は、はじめて子どもがいかにできないかを知ったという。そして共に台所に立つことで親子の対話も増え、家族全体の食べることについての関心も高まったという。

私たちは「食」の問題を単に栄養や空腹を満たすと

いうことではなく、家族の結びつきという点で見直すことが大切ではないか。例え、家族が共に食事ができなくとも、家族の食生活に関心を持ち、工夫していくことは、身体的な健康ばかりではなく、心の健康にもつながるものではないかと考えている。

(青森県教育庁)



保育の原点としての「共在」

嶺村 法子

プロローグ

初めて肢体不自由児養護学校を訪れたときの驚きを、私は、今でも忘れることができない。それは、本来ヒトがとるべき姿勢からあまりにかけ離れた、アンバランスな肉体がうごめきあっていることへの、恐怖と嫌悪が入り混じったような気持ちだった。案内してくださった教頭先生の横で、近づいてくる子どもたちに精一杯の笑顔で応え、手を握り返しながら、この子たちは、一体何なのだろう、という思いを拭い去ることができずにいた。

私の目の前で展開されている光景は、ついさっきまで私が身を置いていた世界とは、まるで異質なもののよう
に思われた。座位がとれないために抱きかかえられた子どもたちの間を、歌いながら、あるいはボールをころがしながら、先生たちが往き来していた。子どもたちの静けさ……ギョロリと飛び出しそうな眼球、自傷のためになくなつた唇、変形したからだ……の上に、先生たちの声
が異様な明るさを放っていた。これらの出来事は、今までの私の経験の枠をはるかに超え出たところにあつ

て、なんとか自分の言葉で意味付け、理解しようとする努力は、空しく実らないまま、校長室に向かって歩き出していった。

「子どもの接し方が上手ですね。」

教頭先生のひとことに我に返った私は、不安な心を見透かされずに済んだらしいことに半ばホッとしながら、一方で、これから先のこの子どもたちとの生活に思いを馳せて、引き返したくなるような衝動に駆られていた。

「そりゃそうだろう。」

と、教頭先生の報告を受けて、校長先生がおっしゃった。そのひとことから、児童学科出身なんだから当たり前だ、という驚きが伝わってきて、ますます身を縮めたくなった。

こうした一連の手続きを経て、私は、四月五日付けで、一年間の産休、育休代替として、その養護学校の高三の担任に命ぜられた。生徒十人に、担任五人の体制だった。前年度の一年間を、やはり、産休、育休代替とし

て、盲学校の幼稚部に勤務した私は、今度は肢体不自由児の、しかも高三担任という、これまた、まったく未知な世界に足を踏み入れることになったのである。

新たな問い

私が初めて障害児とつきあうことになったのは、大学三年生のとき、愛育養護学校家庭指導グループで、実習生として保育に参加したときだった。その後、四年間にわたってグループの保育に参加する中で、常に問い続けしてきたのは、子どもとの関係の持ち方であった。特に、一人の女兒Y子との出会いを通して、関係とは、その時々々の保育者の視点や意味付与の仕方によって変容し得るものであることに気づかされた。重く苦しい関係も、自己と他者に肯定的な意味を創造することによって新たな関係へと開かれていくのであり、その意味は、自ずと見出されるだけではなく、主体的に創り出していくことによって「意味」になるのだということを、私は自覚した。この自覚は、関係の持ち方を問い続けてきた私にと

って、ひとつの明確な答えだった。(*)

しかし、肢体不自由児養護学校での、重度重複と呼ばれる子どもたちとの出会いは、この答えを、さらに根本から問い直させるものであった。彼らに対する私の行為に、あるいは、彼らの微妙な表情の変化に、何らかの意図を付与するということ自体、自らの行為を正当化し、それに安住すること以外の何ものでもないかのように思われたからである。私とは決して対立することのない他者の出現によって、関係以前、意味以前の「共在」ということ、すなわち、共に在ることそれ自体に、目を向けざるを得なくなったのである。

(*) 詳しくは「幼児の教育」第八十六巻第十二号に、「保育における受容の問題」として掲載した。

一か月を経たある日のノートから

〈保育の視点〉

異なった過去を生きてきた子どもと大人が、それぞれ自

分らしくありながら、しかも調和を保って、共同の生活を生み出していく——それが、保育という営みであり、保育者として、子どもが自分らしく活動できるよう支えていたいと思ってきたし、今もその姿勢に変わりはないと思っている。しかし、ここでの生活、特に、重度重複と呼ばれる生徒たちとの生活は、そもそも「自分らしくある」とか「共同の生活」というのはどうということなるだろう、というところから問わざるを得ない。

歩けない、喋れない、やりたいことがあるようでもない。そういう子どもたちが、「自分らしくある」とはどのようなことなのだろう。そういう子どもたちに対して、「私らしく振舞う」とは、どうすることなのだろう。いったい、私には何が求められているのだろうか……。

食事と排泄の世話をし、衣服を取り替え、快適な環境を整えること、そのことが「共同の生活」なのだろうか。確かにそう考えることもできるだろう。その子どもがそこに存在するということ自体が、私たちに何らかの感情を湧き起こさせ、そして何らかの働きかけを引き出

させる……そう考えれば、確かにそれは「共同」のなせる業だろから。

△空虚な行為▽

一方で、食べさせる、オムツを取り替えるという作業は、ごく機械的にも行えることに気づく。黙々と、ただスプーンを口に運び、汚れたオムツをビニール袋に入れる。ふっとその自分に気づいて、慌てて「おいしい?」「気持ちよくなった?」と目をのぞきこんだりする。名前を呼んだり、ほほをさすってみたり……

ハンノウハ、イマヒトツ、ヨミトレマセン……それでも、何だかんだと話しかける。自分を励ますために、場を持たせるために……時に、行き場を失った声が、虚ろな驚きを残して宙をさまよう。そんな中途半端な、心からではない働きかけしかできない自分が、ひどく情けなくなる。反応の確かでない子どもを前にすると、日頃、自分が、どれほど相手の反応に左右されているか、どれほど相手からの働きかけを期待し、それに助けられている

るかが、実によくわかる。

△結ばれる関係▽

名前を呼べばニコッと笑うとか、差し出したものを喜んで受け取ってくれるとか、からだを揺すると笑顔になるとか、そういうことが、心のつながりを感じるためにどれほど大きな役割を果たしていることか!これによってたと確認できる安心感、他に一緒に楽しめることを探す気持ちだが、小さな関係の芽を育てくれる。そして、相手の方から笑いかけてくれたとか、手を引っぱってくれたとか、そんな小さな働きかけの積み重ねが、絆をさらに強くしていく。

「共同の生活」というときには、こうしたジグザグに直線で結ばれるイメージ、一方向的ではなく、相互的に働きかけあいながら高まっていくイメージが、つきまとう。しかし、そうしたイメージでは把えきれないところに、最初の問いが出てくる。たとえ反応が得られなくても、私はそこにおいて、何かしなくてはならないの

だから。

△包み込む関係▽

こうして、今までのことを思い出しながら書いているうちに、ひとつ気づいたのは、みんな自分を盛り上げるのが上手な人が多いということ。眠ってばかりいる子どもの鼻にかみついて「おはよう」のあいさつをしたり、思いつきりニコニコしてほめちぎった後で、理由もなくいきなり怒鳴って泣かせたり、引っぱったり、なでさすったり、つまんだり：そういうことをして、否応なく反応を引き出させ、それをみんな楽しんでしまう。そこでまた、優しくなぐさめる人あり、さらに嫌がらせをする人あり。迷惑そうな子どもの泣き顔をよそに大笑いする——そういうことを実にうまくやる。

反応の乏しい子どもと日々共に生活していくための、それはひとつの知恵かもしれないと思う。毎日が本当に同じように過ぎていく中で、その重さをどうやって持ちこたえ、明るい気分で前向きに歩いていくか——という

ことを考えると、きっかけは何であれ、笑いの渦にもろともに巻き込んでしまつて、明るさとか、教師どうしの和やかな雰囲気とか、そういうものを漂わせておくことが必要なのではないか、と思う。そうすることで、ジグザグしたイメージでは扱えきれない、もつとぼわぼわした包み込むイメージの、しかも一対一ではなくて、大勢ガヤガヤいる、そんな「共同の生活」の可能性が開けてくるのかもしれない。

先日読んだ『育てるものの日常』（津守房江著 婦人の友社一九八八）に、こんな一節があったことを思い出す。

『人と人との結びつきや、親と子との絆を考える時、私は、糸や紐をイメージし、愛で結ばれることを考えていた。だが、結ばれる愛は、時にはもつれ合うこともあるし、ほどけない不自由さの中に生きることもなることを思う。それに対してただよう愛は、大気の中に含まれる匂いや、光や、湯気と同じように、自由さを失わないで、確実に取り入れられ、相手を生

かすものになるのではないか。』

このノートを書いた時から約一年経った今、他者を包み込み得るには、まず彼らの生に巻き込まれ、それまでの枠をつき崩され、無力さを思い知らされる経験が必要だったことに気づかされる。

一学期終わりのノートから

そこに在るといふ存在の重みを、これほどまでに感じたことは、今だかつてなかった。とにかく彼らは、私の横に息づいているのであり、私に何らかの感情を湧き起こさせ、そして、何かしらの働きかけを求めてくる。否、求めてくるというのは、正しくないのかもしれない。訴え、求めるだけの自我を彼らは持たない。にもかかわらず、私はそこに居続け、何かをしなければならぬ。その何かとは、それをすることによって私もまた何かを受けとるといふ類のものではなくて、純粹に一方的な何かである。

それでも、私は、自分の行為に対する応えとして、彼らの表情に何らかの意味を見出そうとする。例えば、それは、楽しそうに私の方を見たとか、文句を言いたそうな目をしたというような言葉で表現される。そして、確かに、そういう意味付与が、私を再び彼らに向かわせ、次なる行為をおこさせる契機となる。だが、はたして、彼らは私の呼びかけとは無関係に、中空を見つめ、声をたてて笑う。それでも尚、私は、その傍に居続けることを求められているのだ。

いったい誰によって——？ 学校という制度によってもなく、親によってもなく、彼ら自身がそこに在ることによって。それほどまでに、存在は重く他者にのしかかり、他者を巻き込む。彼らの生の本質は、他者を巻き込むことにあるのかもしれないと思えるほど……。

* * *

変化とか、上昇とか、目的としては最も求めていなかったはずのものを、「日々の保育の結果として、そうなるのだ」という前提で、実は求め、そしてそれに支えられ

ていたことを実感する。

* * *

私は、他者の反応によって、私の輪郭を形作る。他者からの反応によって自己の位置を定められないとき、私の輪郭はとめどなく拡散し、いつしか己の核がむき出しにされる。彼らを前にして、私は、己自身と向き合わせるを得ない苦痛を味わう。

このとき、他者の微妙な反応に多大な意味を付与し、それを己の核のまわりに浮遊させておくことで、ひとときの安らぎを得ようと努める私が見えてくる……

このとき以来、私は、「関係」とか「意味」とか「在り方」といったものについて、なるべく目を向けないように、立ち止まって深く考えないようにして、日々を過ごしてきた。そして、この生活が早く終わることを、どこかで願っていたように思う。

だから、卒業の日が迫ってくるにつれ、私の中に、切々と別れ難い思いが去来することに、自分でも驚きを禁

じ得なかった。誰もいない部屋で、私は子どもを抱きしめ、語りかけていた。もはや、彼女の反応の無さとか、自らの言葉の虚ろさは、問題ではなくなっていた。私は、素直に自分の思いを言葉にした。

「Tちゃん、もうすぐ会えなくなるんだよ。ねえ、どうする？ 卒業しちゃうんだよ……。」

どうしてこんなに愛しさを感じるのか、いったいこの思いは何なのか、胸の奥から突き上げてくるような、…そして、ほのぼのとあたたかい…。

私は、弱き者に与えられた大きな力を実感した。その生に、巻き込まれ、揺さぶられ、つき動かされてきたこの一年を、今、ゆっくりと懐しんでいる。

再び、保育の視点

問いに対する答えは、問い続けることで見出されるとは限らない。問うことをやめることが、その問いに対する唯一の答えである場合さえある。

村瀬学は、重度の子どもの世界に触れた著書『理解の

遅れの『本質』(大和書房一九八五)の中で、次のように言っている。

「その子らを問いはじめると、その問うている者自身がなさけないほどにあいまいになってくる。」「ひとつだけ確実にいえることがあるとしたら、『そこにその子がいる』ということだけである。」そして様々な問いも「そこにいる」という『確信』にくらべたら、わざわざ問うほどの問いでもなくなってくるのである。

『この子はここにいるじゃないか』何をそんなに細かく問う必要があるのだ、と。」

障害の有無にかかわらず、子どもたちを前にして、私たちは、時に、己の無力さ、問いの不毛さを思い知らされる。しかし、彼らは確かにそこに存在し、私たちは、彼らと共に在ることを必要とされている。保育の目的とか、活動の意義とか、子どもとの関係とか、そういったものが、ことごとく不確かで曖昧になっていったとしても、彼らが存在し、そのために私たち保育者の存在が求

められているという確信は、決して揺るがされることはないだろう。

この確信は、子どもと生きる保育者にとって、最も根源的な確信であり、この確信の上に、保育の原点としての「共在」があるのではないか、と思う。

(東京都中央区立明石幼稚園)



いく母とおいかける私

やまだようこ

1 お母さん！ あなたはどこへ行くのですか？

お父さん！ お父さん！ あなたはどこへ行くのですか？

ああ、そんなに早く歩かないでください。

話しかけてください、お父さん、さもないと僕は迷い子になってしまおうでしょう。

図1は、「幼いときの母と私の関係」をイメージして描いた女子大生の絵のうち一枚である。今回はこの絵を核にしたが、母子関係のさまざまなパターンを考え

てみたい。

図1には、一本の道が描かれている。この道は、上へ上へと伸びており、さらに山また山を越えて果てしなく続いているようにみえる。お母さんは、この道をどんどん走っている。子どもも、けんめいにお母さんを追いかけて走るのだが、追いつくことは難しそうである。

子どもは走りながら手を振り上げて、「お母さん、ちょっと待って、そんなに早く行かないで！」と呼びかけているかのようである。けれどこの母は、足を緩めて子どもの歩調に合わせるところか、子どもの様子を見た

私が母を追いかけるがぜんぜん追いつかない。
あまり、話した覚えがない。
いっしょにすごした覚えがない。



▲図1 上に向かって行く母を追いかける私

めに振り返る気配さえない。

この絵には「あまり話した覚えがない。いっしょにすごした覚えがない」と説明がつけられているが、この母は子どもにやさしい言葉をかけて、足の痛みをほぐしてくれることもないだろう。

わたしは、この絵をみてすぐに、前記に引用したようなブレイクの詩句を思い出した。この詩句は、大江健三郎氏の小説『父よ、あなたはどこへ行くのか?』の中で始めて出会ったものである。

ここで「あなたはどこへ行くのですか?」と呼びかけられるのは、「お父さん!」でも「お母さん!」でもよい。場合によっては、「先生!」「師匠!」「先輩!」「神さま!」などと呼ばれるかもしれない。それらの名前は慣用化された記号なのだから、その名前で意味されるものに必ずしも本質的な違いがあるとは限らない。

したがって、通常どのような名前と呼ばれるかということ、つまり「母」という名前にはこだわらないで、そこに表現されている、「人」と「人」とを結び二者関係

の基本的なありかたに目を向けてみたいと思う。

2 話しかけてください、お母さん、さもないと迷い子になってしまってください。

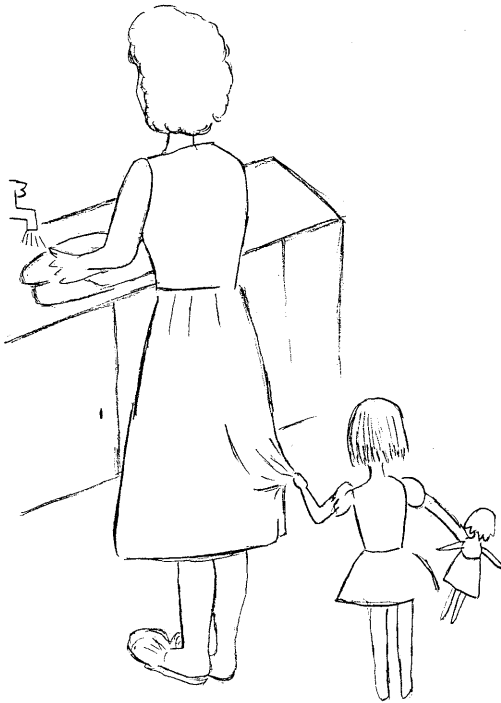
先にわたしは、二者関係の基本構図をまとめて、母子関係の網目モデル(その1 参照)を作製したが、図1は、そのなかで『いく母とおいかける私』の構図のひとつとして位置づけられる。

この構図は、あたたかく身の内に子を包みこむ『つつむ母といれ子の私』の構図(『私をつつむ母なるもの』有斐閣参照)や、子どものために土台や傘や盾や支柱になつてつくす『ささえる母ともたれる私』の構図(その1)とは対極にあるもののひとつである。それらの絵では、母よりも子が中心で主導権は子どもの方であったが、「いく母」では逆だからである。

またこの構図は、二人が仲良く手をつないで並んで微笑みながら歩く友達のような関係『並ぶ母と私』の構図とも、相対する位置にある。母は、子どもに合わせて子

どもと共に歩くことはなく、自分の道を自分のペースで先へと進んでいるからである。

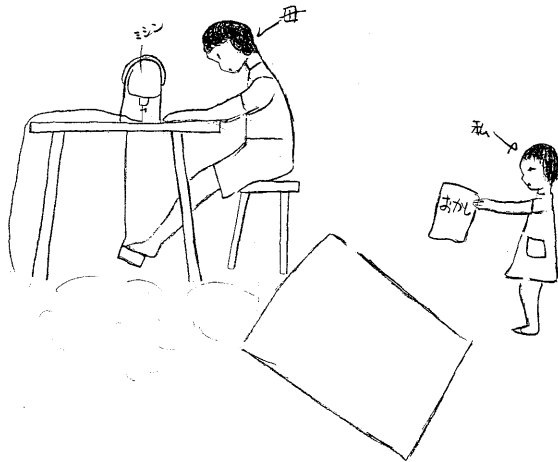
このような母は、冷たいようにみえるだろうが、必ずしもそうではない。子どものために犠牲になって生きて



母は働いていたし、末っ子でもあったので、いつも母にくっついていました。

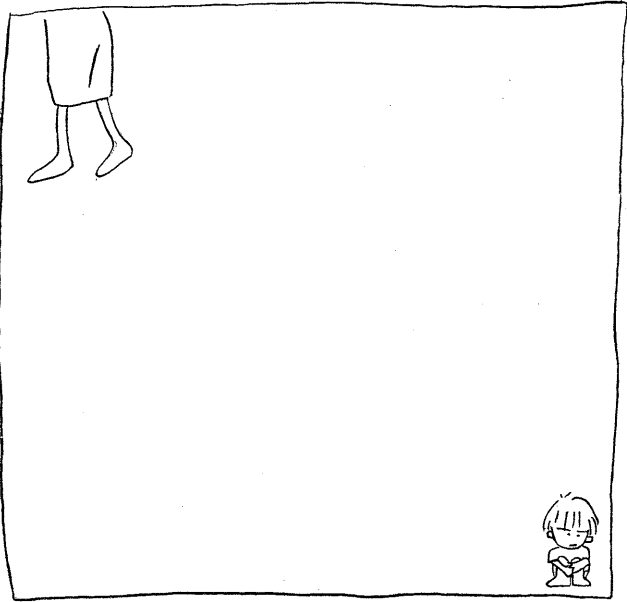
▲図2 母の後ろでスカートをひっぱる私

くれる母をもつことは、有り難い反面、重荷にもなる。子どもをどっしりと支えてくれる母は頼りになるが、ふ



お母さんがミシンの内職をしている時に、私がお母さんに「お菓子食べていい？」と聞いている所。

▲図3 母の後ろから菓子袋をさし出す私



▶ 図4 母と離れて部屋の隅でしゃがむ私

一人っ子なのにかわいがってもらえずいつもひとりてくらかった。母親は若くて、ヒステリーだったので、とてもこわい存在だった。

かふかと温かい安楽椅子から子どもが自分で離れるのは大変で、独り立ちするには勇気がいる。「いく母」の場合には、母の方から身を低くして子に手をさしのべることがないかわりに、母の手の中に閉じこめられて窒息しそうな苦しみは少ないだろう。

だが、背中を向けて「行く母」を、私が追いきれなかったり、私の呼びかけにもかかわらず母が応えてくれなことが重なると、母と私のあいだの距離がどんどん開いていく危険はある。図2から図4を順次みていくとわかるように、その距離が埋めがたい空白になってしまう場合もある。

図2では、子どもは台所仕事をする母の後ろでスカートをしゃっかりつかんでおり、離れまいとしている。

図3では、子どもは「お母さん、おかし食べていい？」と言いながら精いっぱい手を伸ばして菓子袋をさしだしているが、背中を向けて仕事する母との距離は、かなり開いており、子どもの手は母の所まで届きそうにない。母も振り向く様子がみられない。そして二人のあ

いだには、越えがたい「溝」や「ギャップ」があることを象徴するかのように、四角で囲った線が描かれている。

図4では、二人のあいだは決定的に離れており、私は、もはや母を追いかけようとはせず、呼びかけることも、手を出そうともせず、ひとりぼっちで部屋の隅で、ひざをかかえてしゃがんでいる。

これらの子どもたちは、寂しそうな表情をしており、「お母さん、振り向いて、私の方を」「話しかけてください、お母さん、さもないと迷い子になってしまうでしょう」と訴えているようである。

3 夢の国はあんなに遠いのに、明けの明星の光の上にあるのに。

お父さん、ああ、お父さん！

僕らはここでなにをしているんですか、この不信と恐怖の土地で？

夢の国はあんなに遠いのに、明けの明星の光の上にあるのに。

母性愛の信奉者は、あたたかく子を包みこむような母や、子のために身を犠牲にする母だけを理想と考えがちである。しかし母子関係は、あらゆる人間関係と同様にワンパターンではありえないし、これがベストというような母子関係の公式があるわけではない。長所と短所は裏表であるから、どのような母のあり方もそれぞれの良さをもっている。

「いく母」は、子どもの方に降りて身を添わせるやさしさはないかわりに、「進むべき道」や「目標」や「高み」をもち、母自身が「走る人」であるところが素晴らしい。

ブレイクの別の詩句のように、このような母は、少し先を行く先輩にすぎないから、子と同じように迷い子になる危険をもつ。子も寂しいが、母も恐怖や孤独と無縁ではない。しかしそれは、理想や高みをめざす限りついてまわるものだから、それに独り耐えられる力をつけることも必要である。

また子どもは、母が熱心に努力する姿を見れば、自発的に追いかけることも多くなるだろう。子どもは母の「背中」を見て育つ。子どもは、母を「見本」「手本」「モデル」として、母から技を盗みとろうと工夫をこらす。

このような関係は、日本の伝統的な師弟関係によくみられる。同じことでも自ら目標をたて自主的にやる時には、発揮する実力は何倍にもなるから、教育的機能が高い、しかも、目の前にレベルの高いモデルがあれば、追い越そうと励む力も増すのである。

次のような岡本太郎氏の場合は極端にしても、母と子の関係の仕方はさまざまであること、そしてそれぞれに良さがあることを私たちに教えてくれる。

私の母（岡本かの子）は歌人だった。父は朝から新聞社に出て行き、帰りは夜遅くなる。まる一日、家の中はひっそりしている。母と私と二人きりだ。母は文学に情熱を燃やし、一日中机に向かって本を読んだり、書きものをしていた。

幼い私はまったく無視されていることが不満で、母の背に飛びつき、何とか相手になってもらおうとする。母はうるさ過ぎて、兵児帯を私の胸に巻きつけ、その端をそこらの柱とか簞笥の縁に結びつけてしまう。犬っころのように。

明るい障子、庭に面した机に向かって、ばざりと黒髪を背にたらし母の後ろ姿……それは私の眼にやきついた強烈な思い出だ。半日もその背中しか見えない。いくら私が泣いても畳の上でもだえても、振り向いてくれなかったのだ。

画家の中川一政は学生のころ、家をたずねて来てその情景を目撃してさすがにあきれたそうだ。確かに私もいたずらっ子だったが、母も普通ではなかった。私を愛していたことは事実だ。けれどこまごまといわゆる母親らしくかまってくれろということとはまるでなかった。不器用だし、出来なかったのだから。

だが、それでいながら私はそんな母が好きだったし、憧れていた。縛られて、辛くて、悲しみ泣きわめきながら、しかしそのみじんも動かない母の後ろ姿に、何か神聖感を覚えた。

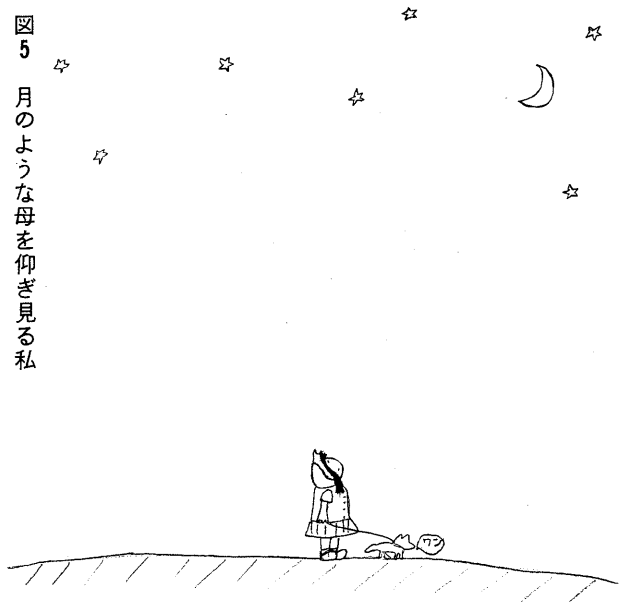


図5 月のような母を仰ぎ見る私

母は内職やおつとめであまり接したことはなく、近づきたいのに近づけないお月さんの様でした。
私もそれをながめるだけで真近の友だちと遊ぶばかり。
母と遊んだ思い出はほとんどないのです。

世話をしたり、愛撫してくれることだけが母親の役目ではないのかもしれない。孤児のように勝手に生い育ちながら、私は母と強い一体感を抱いていた。

(岡本太郎「自伝抄1」より、読売新聞社、一九七七年)

「夢の国」や「明けの明星の光」をめざして自ら「いく母」は、子どもに尊敬され仰がれる母となることも多い。その意味で『いく母とおいかける私』の構図は、図5のような『そそぐ母とあおぐ私』の構図にも近づいていく。子どもに迎合する甘いキャラメル・ママに比べ、厳しさと尊さをかねそなえた近づきたいほどの崇高な母は、今では少数派であるうが、そのような母をもつ子はそれなりに学ぶものも多いにちがいない。

(愛知淑徳大学)

昔話の一考察

—女性の心の内的成長について—

小野 瑞江

I はじめに

昔話は長い年月をかけて祖先に語りつがれてきたものであり、時代を越えて存在し続けてきた貴重な心の民族遺産といえる。フォン・フランツによると、この昔話は「普遍的無意識的な心的過程の最も純粹で簡明な表現」であり、「それは元型をその最も単純で明らかな、かつ簡潔な形で示して」いるとされる。しかもその「元型的イメージは、普遍的な心に生じている過程を理解する最善の手がかりをわれわれに提供する」。従って昔話において主人公が様々な困難と出会い、それを克服していく過程は、現実の人生で私たちが出会う様々な問題解決のための方法を暗示し、時には最善の手がかりをも提供してくれるといえる。

さて本稿では、昔話に語られる結婚における「女性の心の内的成長について」主題とした。主題化の理由の第一は、次のような素朴な疑問にあった。昔話の中で結婚が語られるばあい、主人公が様々な困難と出会い、最後には王子さまあるいは王女さまと目出たく結婚して終わ

るという形式をとる。ここでは結婚は、到達点としての幸福を象徴的に意味する。しかし二人が出会って互いに相手を発見することは、結婚以前同様それ以後も繰り返されるのではないか。

そうであるとしたら、昔話において結婚後も繰り返される相互の再発見（本稿ではそれを男性と女性の変化、成長ととらえた）をこそ考究したい。それが第二の理由となる。結婚について、ユング派分析家のひとりであるA・グッゲンビュール・クレイグは「至福（Well-being：幸福）への道ではなく、個性化に至る一つの道程である」と述べる。個性化への道は「結婚」という状態以外にも様々にありうるが、特に結婚における「男性対女性」という対極性の文脈の中で、双方の意志と努力によってより多く実現される。しかも結婚するという行為によって男性と女性は、「お互いに対決する」という仕事を引受け」、伴侶と添い遂げるといふ苦しみや喜びを通して、お互いに個性化を実現するという。従って結婚自体が目標となって目出たく終わるのでなく、むしろこの時

点から男性と女性の双方にとって、より熾烈な個性化への不断の努力が開始されるのであり、本稿はその進行過程を分析することにある。

第三の理由は、現在活発に展開されてきている様々な女性学研究にかかわる。本稿で主題とした「結婚」に関する研究に限っていえば、女性史的立場からは、結婚の形態およびその歴史的展開から男女関係の変遷を跡づける試みがある。又、文化人類学、民俗学では、結婚にまつわる儀礼や習俗を掘り起こし、その象徴論的考察と分析がなされる。そして女性論的アプローチでは、上述の諸研究を土台として女性の地位や権利、人権にかかわる諸条件の考究を通して女性の解放を主題化しようとしている。これらの研究は主に、結婚の史的説明から、それを支える外的な諸条件、あるいはその意味、価値などにかかわるものである。

ところが「結婚」とは、一对の主体によって「生きられる生の過程」に他ならない。そうであれば、主体自身によって、その生きられる「過程」、「意味」、「価値」が問い返

されることこそ重要な課題となるであろう。しかもそれは外的に表出され、言語化されうる意識領域のみにとどまらず、言語化されにくい無意識の深層に至る領域にまで及んで、はじめて全貌が明らかとなるのではないか。

本稿は以上の動機により昔話の中に象徴的に表された女性の心の内的成長について、特に心の内的成熟過程に注目したユングの分析心理学的手法を用いて考察した。

II 先行研究との関連

昔話のユング心理学的研究については、フォンフランツの名著「おとぎ話の心理学」ならびに「メルヘンと女性心理」などがあり、これらの著作によって昔話の分析心理学の解釈、さらには昔話に語られた女性の本質について知ることができる。

しかしここでは本稿の命題、「女性の心の内的成長」と特に関連する先行研究、エリック・ノイマンの「アモールとプシケー」、河合隼雄の「昔話と日本人の心」、玉谷直美の「女性の心の成熟」に限って述べたい。

さてユング派の分析家であるエリック・ノイマンの「アモールとプシケー」は、ギリシャ神話のプシケーが歩んだ自己実現（個性化）の過程を分析心理学的に解釈したものである。ノイマンは「プシケの物語は、苦しみを通じて発達を遂げるといふ、女性の宿命に入るイニシエーションである」と述べる。つまりプシケーが歩んだ苦難の道は、無意識の楽園から竜とのたたかいを経て課題をなしとげることになり、地下界への旅を貴重な宝物の獲得から聖なる結婚、女神としての再生、子どもの誕生に至る。これらはまさに女性の自己実現の過程ではあるが、極めて西洋的なそれでもある。本稿でその差異にまで及ぶことはできないが、女性の男性機能統合の過程について、ノイマンの解釈から多くの示唆を得た。

日本の昔話を分析したものとして、河合隼雄の「昔話と日本人の心」がある。河合は、日本の昔話に表された様々な女性像を通して、日本人の内的な心の発達を分析的に解明した。ノイマンが「アモールとプシケー」に先立って著した「意識の起源史」において、西洋人の自我を

男性像によって提示したことに対し、河合は日本人の自我を女性像で示す方が適切とする。その女性像は、はかなく消え去る女性から意志する女性まで、自我の発達にそってやや継時的、発達の記載されている。しかし同時に、それらが心の全体性の方向にそって自由自在に姿をかえうる女性像としても分析されている。この著は女性自身の心の成長をみごとに語ったものではあるが、総じて日本人的自我のあり方に焦点があてられている。

本稿では同じく女性の心の内的成長を考察するものがあるが、「結婚」において特に課題となる男性機能の統合に焦点があてられる。これは玉谷直美が「女性の心の成熟」で述べる第三段階に相当するものである。玉谷直美のいう「女性の成熟」の各段階を以下に概略したい。第一段階は成女式という内的イニシエーションを経て母から分離し、娘に変身する時期。第二段階は「死の結婚」を経て母親性を生きる時期。そこでは忘我性、身体性、大地性という主に身体レベルの成熟が課題となる。第三段階は自我の確立へと向かう時期。ここでは男性的

意識の統合を課題とする。第四段階は自我の死の達成である。これら四つの段階は、発達のと同時に「一つの位相」としてとらえうると玉谷はいう。

ところで本稿は、玉谷のいう「第三段階」の男性機能の統合について、特に日本の昔話に語られた女性のいくつかの態度とかがわって考察するものである。

III 本論

さて女性の心が内的な成長をとげていくには、男性機



能とのかかわりが重要となることが玉谷によって既述された。本論文ではこのかかわりにおいて大きな役割を果たす女性の態度を、以下の三つの特性においてみた。すなわち献身、耐えること、積極的な受動である。これらは近代、特に女性解放論的立場の研究が主流を占めねばならなかった時期には、極めて消極的な女性の生き方として、どちらかといえば評価しがたい特性でさえあった。しかし昔話を通してそれらを分析的にとらえた時、消極的とされていた特性が、むしろ女性の心の内的な成長にとっては、極めて深い意味を持つものであると推察される。以下にそれらの特性を語るにふさわしい昔話の代表例をそれぞれあげて考察したい。

1 献身の女性…「鶴女房」

△あらすじ▽男がわなにかかって苦しんでいる鶴を（金を払って）助けてやる。その翌晩、立派な女が男の家にやってきて泊まり、男のおかた（妻）にして欲しいと頼む。男は食物も充分でない貧乏生活なので、「このように立派なあんたを、おかた

になぞできない」と断わる。しかし女に是非にと乞われ、男は女房にする。女房となった女は、翌日から戸棚の中へ入り機を織るが、決して戸を開けて見てはいけないという。女の織った反物は高く売れ、男は「もう一反」と要求する。女は、のぞかないよう固く約束して、再度戸棚に入る。ところが男はがまんできず、とうとう約束を破ってのぞいてしまう。戸棚の中では裸の鶴が羽根を抜いて反物を織っていた。反物を織りあげて出てきた女は、男に別れを告げ、いずこへと飛び去った。男が別れた女（鶴）に会いたくて尋ねていくと、裸の鶴は王様であった。男はそこでしばらくご馳走になり帰ってきたという。

——鹿兒島薩摩郡

鶴女房は日本昔話大成2において、婚姻、異類女房譚に分類されている。しかしそこで語られている鶴女房の類話では、鶴の恩返しが主題となり結婚に至らないもの、あるいは結婚の語られていないものが71話中31話もある。これらの類話について河合隼雄は、仏教説話好みの報恩譚へ変化したものではあるが、あくまでも鶴との婚姻が大切なテーマであったとする。昔話「鶴女房」を

再話した木下順二（「夕鶴」金の星社刊）、神沢利子（「つるにようぼう」ポプラ社刊）も、それぞれのテーマを「鶴の愛とおろかな悲しい男」、「愛の物語」におき、結婚における男女の関係を物語っている。本稿でも「鶴女房」は、日本昔話大成²に従って、異類婚姻譚として考察するものである。

さて女（鶴）は、助けてもらったお礼に男の女房になり、持ってきたお金で米や肴を買い、よく家の世話をした（愛媛県川之江市）。又馳走をつくり正月も立派にしたという（鹿児島県大島郡奄美大島）。さらに女は自らすすんで戸棚の中へ入って反物を織った。このように女性としての仕事をすすんでするばかりでなく、女は機織りが好きでさえある（新潟県北魚沼郡）。しかも上手に立派な布を織りあげることのできる（新潟県佐渡郡）。冒頭に掲げた「鶴女房」では、女は三日ばかり戸棚の中へ入っていて四日目に出てきて、「苦しかったろう。早うご膳を食べてくれ」といわれると、「はい」といってご膳を食べましたという。機織りの間、食事もとらず一心不乱

に仕事をしたにちがいないが、疲れを口にすることもなく、こともなげで素直な反応である。機織りには一週間（鹿児島県鹿児島市）、または三年もかかったと語られる（宮城県遠野市）。

機織りの度に女はやせ細っていった（福島県いわき市）。はつきり鶴が自分の身体の毛を抜いて機織りをしていると語られ（新潟県見附市、同佐渡郡、岡山県真庭郡、長野県下水内郡）、機織りのため精魂つきて赤裸の鳥になったともいう（岩手県遠野市）。命がけで織った（福井県坂井郡）のである。どの類話も身を削る思いで機を織り、実際に身を削ってさえた女の姿が浮きぼりとなる。このように自分の羽根をむしってまで織りあげられた反物は、予想にたがわず高い値段で殿様に買いとられ、男と女はたちまち大金持ちになった。ところが金持ちになると、男は働かなくなつた（岡山県真庭郡）。それどころか欲が出てもお金欲しくなり、もう一反織らせるのである（新潟県両津市）。

いっぽう男はどのように語られているだろうか。多く

の類話に共通する男の像は、第一に貧乏息子であったという。「炭焼き」という職業で語られているはいいもある（鹿児島薩摩郡）。「炭焼き」は昔話「炭焼き長者」の説明によると、世の中のほんとうのナラン者とイコールであり、どん底の貧乏を意味した。正月を迎えるのにふとんもない暮し（鹿児島薩摩郡）、あるいはその日の食べるお米もない状態である（愛媛県上浮穴郡、福岡県企救郡）。その他親孝行息子（長野県南安曇郡、鹿児島大島郡）、正直者（長野県下伊那郡、同北安曇郡）、なまけ者（山梨県西八代郡）、馬鹿息子（新潟県佐渡郡）などと語られる。貧乏かつそれらのプラス・マイナスの諸特性を重ね持った男ととらえることができる。

このようなどん底の貧乏生活にも拘らず、男は傷ついた鶴を見殺しにできず、全財産を投じて鶴を助けた。これが第二の特徴、慈悲深くやさしい男の姿となる。しかも男は傷ついた鶴の介抱だけでなく、女房となった女に對しても極めてやさしい心づかいを示す。たとえば、機織りをすませて戸棚から出てきた女に「苦しかったら

う。心配だったよ。早うご膳を食べてくれ」と思いやる。

第三に男は、もう一つの世界（無意識または自然）とも親しい関係を持つ存在であった。それは鶴の住む世界であり、男は自然的なものに向かってより開かれていたともいえよう。

女は献身という女性特有の仕事を通して、このような男のすべてを受容した。もともと女が男の女房になったのは、傷ついた身を助けてくれた男の恩に酬いることにあった。一方内的には献身という仕事を通して、自己の中の母性を育てる仕事をなしつつあったともいえる。それは、いずれは女性の心の中にある男性機能を統合していく際に大きな役割を果たすものである。玉谷直美は両者の関係について、男性機能の統合に先立って母性という大きな器が育っていないと、「女性が批判力を身につけたとき、自分自身の女性性を切りきざむ恐れが出て来ます。そしてそれは男性を去勢する方向へと動きはじめます」と述べている。

さてお金ができるまでは、現実の男も女の献身によく

応えることができた。ところがお金ができ、欲深くなった人間は不安も高くなる。不安の高い人間は、約束を守ってじっと待つことができなくなるにちがいない。当然男は女房である鶴の住む世界から遠ざかり、だんだん別世界の人間、濁った現実の世界の人間になりつつあったにちがいない。とうとう男は女との固い約束を破って戸棚の中をのぞき、裸の鶴を見てしまう。

女は男に真の姿をみられ、泣き泣きいずこへか飛び去る（山形県最上郡）。また精魂つきて赤裸の鳥になって去る（岩手県遠野市）、遂には首をつつて（広島県比婆郡）、赤裸で死んでいる（埼玉県川越市）と語られる。女は自分の真の姿を見られると同時に男の変わり果てた姿をも見たといえよう。相手の真の姿が見えてくるということ、は、自分の真の姿に気づいていくということでもある。それはまさに死に至る程の衝撃であった。プシケの神話において、プシケが二人の姉にそそのかされて、灯をかかげて夫の正体を見た時の衝撃も、実にそのようなものであったにちがいない。ノイマンはそれを「プシケーが本



来のプシケーに立ちかえるような覚醒であり、これこそまさに女性の人生における決定的瞬間である」と述べる。プシケーが暗闇の楽園において母性のみに生き、夫の正体を見ないですんだなら、そのまま幸せな人生を送ることができたであろう。しかし一度目覚め、意識の灯をかかげてしまった女性は、苦難の道を歩まねばならない。遂に男と女の別れの時がやってきたのである。女が身を滅ぼす程の献身をもって育ててきた母性もそのまま、女は傷ついて姿を消さざるをえなかった。女が男性機能を心の中に位置づけるには、また時を待たねばならない。

2 再び耐える女性…「天人女房」

△あらずじ√みけらんという若者が、水浴びしている天女の羽衣（飛びぎぬ）を手に入れる。男は天女の「どうか返して下さい」の頼みに応じず、家へつれ帰って結婚する。やがて三人の子どもが生まれる。ところが女はある日、長い間さがしていた自分の隠された飛びぎぬをみつげ、天に帰ってしまう。男は女の残したかきつけ通り、下駄千足、草履千足を地に埋め、それにきん竹を植え天女の後を追う。天に着いた男は、天女の父神から三つの難題を出され、天女の助けをかりて次々とやり遂げていく。ところが最後の難題をやり遂げた後、気を許して大水に流されてしまう。その結果男は犬飼星に、天女は織女星になり、彼らは年に一度、七月七日に逢うことができるのみであるという。——鹿児島県大島郡

天人女房における男と女の結婚は、男が女の羽衣を一方的に隠して家へつれ帰ったところから生じた。長野県上伊那郡の類話では、男が水浴びしている天女の羽衣を隠し、ひとり天に帰れないで困っている女を、「欺いて連れ帰る」と語られる。

男が女の着物（羽衣）をとりあげて隠してしまうとは、どのようなことを意味するのだろうか。衣服は外界から裸身を守るといふ役割を果たす以外に、人間が外界と調和していく為に外界に向けて見せる仮面でもある。ユングはこの仮面をペルソナと呼び、夢の中では一般に「衣服」など、自分の身につけているもので表されていることが多いとする。天の女はペルソナとしての飛び衣を男にむりやりとりあげられてしまい、もう生まれ故郷である天へ戻れなくなってしまったのである。

その意味することは、娘からひとりの男の妻として、そしてやがては生まれる子どもの母親として新しいペルソナを身につけることを要請されたこととらえることもできる。家庭生活の様々なことがらは、女性に対して自我放棄を要求することがらで満ち満ちている。その時女性は、心の中に様々な矛盾をかかえたまゝ、耐えるという行為によってその難事を克服しようとする。玉谷直美はその内的な意味を次のように分析する。つまり女性は、家庭生活において娘時代につちかかってきた自我を放棄し

て（娘の死）、そのことを通して新たな実りある母へと成熟し、新たなペルソナを身につけることになる。「新たな自我を確立する以前に、女性はどうしても『耐える』という仕事をおかねばならない』のである。

しかし今迄つちかかってきた自我を放棄することは容易ではない。天の女は男との生活に耐えながら、一方たえずもとの天へ戻ることを願っていた。七年目、遂にもとの飛び衣をさがしあて、女は天なる国へ戻ってしまった。その時女は、完全に姿を隠して男との関係を永久に絶つことはしなかった。夫への書き置きを残して天へ昇ったのである。

母性の発展にとって、自我を放棄して歩む「受容」のプロセスは、一直線の方向で一挙に進むのではなく、行きつ戻りつしながら、ゲゼルが述べた発達方向と同様、らせん状に展開しつつ深まっていくようである。しかも母性の発展においては、ある段階から次の段階への深まりに際して、必ず精神的な葛藤を伴うため、全人格を賭けて達成することになる。その結果達成された一方

の発展は、もう一方にもそれに対応する変化をひき起こさずにはおかない。その意味で「天人女房」では、次に男の変容が語られていると考えられる。

さて女が天に戻ってはじめて、努力と辛抱を要する男の変容過程が語られる。女の残した書き置きは、「下駄を千足と草履千足集めて地の中に埋め、その上にきん竹を植えると、二〜三年後に天まで届く」というものであった。女が天へ戻る時子どもをつれていく類話もあるが（香川県仲多度郡、広島県佐伯郡、岐阜県吉城郡、新潟県長岡市、埼玉県所沢市）、数は少なく、大多数は三人の子どもが残される。男にとって妻のいない子どもづれの生活は、大変な努力と忍耐が要る日々となったであろう。

やっと竹が伸び、男は女のいる天国へ登った。天国には女の後に父神が控えていて、三つの難題が出される。その第一は、千町歩の山を一日で伐り拓き、第二に、そこへ一日で唐爪の種を蒔き、第三は、一日でそれを取り入れることであった。男性機能の特性が、その鋭い切断の能力にあるとすれば、山を伐り拓いたり、木を伐って

焼き払うこと（高知県高岡郡）は、まさに男の仕事である。さらに第二、第三の種子を拾い、種を蒔き、とり入れることも、分類し方向づけ秩序を与える作業として、男性機能のもつ特性といえる。一方女性機能は、どちらかといえばすべてのものを包含し、他人を調和することが主となる。従って女性機能にとって分析し、秩序を与えたりすることは苦手なのである。さて男は天女の力を借り、父神に課された難題に向かった。

ところで「天人女房」は、男が努力して変容の過程を歩む話として分析してきた。しかし視点をかえ、女の側からながめると、異なって見えてくる。つまり女（天女）の心の中の男性像が活躍する姿と読み解くと、天において女は、男性機能統合の仕事をなしとげるべく働いたといえる。玉谷直美は前述の著書で、すべてを包含する入れ物としての女性性に、秩序と方向性を与えることを男性機能統合の第一段階と述べる。プシケーに与えられた「穀物の分類」同様、天の女は今それをやり遂げつつある。これは大変な難題であった。何故なら、山を

伐り拓き、耕し、種を蒔き、とり入れる仕事は、最低でも一年は要する。それをわずか三日で達成せねばならなかったのである。しかも既述のように、女性機能にとって苦手な仕事でもあった。

ところがもう一步の所で男性機能の反逆に出会って、今迄の努力が水に流されてしまう。男性機能は、いつまでも素直であるとは限らない。その統合は、ひとすじ縄ではないかというのである。

とうとう女は、いまだ男性機能を自己の中に確かに位置づけることができず、夫（男性機能）と別れることになる。とはいえ男性機能統合への道は完全に絶たれたのではなく、一年に一回ではあるが、男とめぐりあえるというかすかな可能性の中で、統合への道が残されたのである。

— つづく —
(福山短期大学)

子どもにとって楽しい

音楽リズムのあり方を考える (2)

原口 純子

I 主題について

II 研究方法

III 研究内容

0、活動の洗いあげ一覧 (P 50・51の表)

1、歌唱 (1) 種類と傾向、考察 以上五月号掲載

(2) 歌の指導方法

子どもには歌はどのように指導され、子どもはどのようにして歌をおぼえているか。

事例1 一斉指導 年少「すてきなパパ」

導入部：「みんなのお父さんってどんなかな」と問いかけてイメージを持たせる。

教師が歌ってみせる

←

教師と知っている子で、一緒に歌う

←

二小節ずつこまぎれにして歌う

←

ピアノの伴奏をつけて、全体通して歌う

←

歌い方の指導をする

事例2 自由形態↓一斉活動 年少「こいのぼり」

0. 活動の洗いあげ（音楽リズム実施内容）

(6月) III	(5月) II	(4月) I	期		歌	唱	器	楽	わらべうた	動きのリズム	手	あそび																
			年	少																								
<ul style="list-style-type: none"> ●バナナの親子 ●すてきなパパ ●ホ・ホ・ホ ●かたつむり 	<ul style="list-style-type: none"> ●お母さんのうた ●空にらくがき ●かきたいな ●かえるのうた ●ぞうさん ●歯をみがきましょう 	<ul style="list-style-type: none"> ●先生とお友だち ●ちようちよ ●こいのぼり ●うた ●たんじよう日のうた ●たなきましよう ●手を 	年	少	<ul style="list-style-type: none"> ●むすんでひらいて ●チューリップ ●つくしがでたよ ●ちようちよ ●犬の ●おまわりさん ●おもちゃのチャチャチャ 	<ul style="list-style-type: none"> ●めだかの学校 ●チューリップ ●つくしがでたよ ●ちようちよ ●犬の ●おまわりさん ●おもちゃのチャチャチャ 	<ul style="list-style-type: none"> ●アイスクリーム ●雨ふりくまのこ ●うたえバンバン 	<ul style="list-style-type: none"> ●おおかあさん ●こいのぼり ●ソフトクリーム 	<ul style="list-style-type: none"> ●カステネット ●タンプリン ●(大きなたいこ) 	<ul style="list-style-type: none"> ●カステネット ●タンプリン ●すず ●トライアングル ●カステネット ●自分たちで作った楽器 	<ul style="list-style-type: none"> ●カステネット ●タンプリン ●すず 	<ul style="list-style-type: none"> ●かごめかごめ ●あぶくたつた ●はないちもんめ ●にえたつた 	<ul style="list-style-type: none"> ●かごめかごめ ●あぶくたつた ●はないちもんめ 	<ul style="list-style-type: none"> ●ホ・ホ・ホ 	<ul style="list-style-type: none"> ●ホ・ホ・ホ 	<ul style="list-style-type: none"> ●お父さん指どどこですか ●グーチョキパー ●で、何やろう ●さくらんぼ 	<ul style="list-style-type: none"> ●お父さん指どどこですか ●グーチョキパー ●で、何やろう ●さくらんぼ 	<ul style="list-style-type: none"> ●おちやらかホイ ●まあるい玉子 ●おちたおちた ●お天気 ●じゃんけん 	<ul style="list-style-type: none"> ●おちやらかホイ ●まあるい玉子 ●十五夜さんのもちつき 	<ul style="list-style-type: none"> ●アブラハムの子 ●あく手で ●あく手 ●たけの子体操 ●たけの子体操 ●パードダンス 	<ul style="list-style-type: none"> ●アブラハムの子 ●あく手 ●あく手 ●たけの子体操 ●たけの子体操 ●パードダンス 	<ul style="list-style-type: none"> ●南の国のハメハメハ ●クリーミーマミ ●べビーロックン ●ローランド ●マーチング ●マーチ ●チャチャチャ ●デビルマン 	<ul style="list-style-type: none"> ●ホ・ホ・ホ ●ホ・ホ・ホ 	<ul style="list-style-type: none"> ●ホ・ホ・ホ ●ホ・ホ・ホ 	<ul style="list-style-type: none"> ●お弁当箱 ●げんこつ山のたぬきさん ●ひげいじさん 	<ul style="list-style-type: none"> ●お弁当箱 ●げんこつ山のたぬきさん ●ひげいじさん 	<ul style="list-style-type: none"> ●でかちゃん ●ちびちゃん 	<ul style="list-style-type: none"> ●でかちゃん ●ちびちゃん

(12月)	(11月)	(10月)	(9月)	(7月) IV
<ul style="list-style-type: none"> ●あわてんぼうのサンタクロース ●ジングルベル ●むつくり熊さん 	<ul style="list-style-type: none"> ●こぶたぬきつねこ ●みんなの広場 ●ほんすしゅう ●こねこねこのこ 	<ul style="list-style-type: none"> ●どんぐり ●秋の小人 ●エータムタム ●まつぼっくり ●さくのはな ●さくこの ●やさしいも ●でふいもちゃん ●ちびいもちゃん ●おもちゃのチャチャチャ 	<ul style="list-style-type: none"> ●バスこっこ ●えんそくのうた ●こおろぎ ●こおろぎ ●ゆうやけこやけ 	<ul style="list-style-type: none"> ●うみ ●七夕 ●キラキラ星 ●七夕さま
<ul style="list-style-type: none"> ●小さな世界 ●みんなでつくろう ●カレンジャー ●シングルベル 		<ul style="list-style-type: none"> ●遠足 ●まつかな秋 ●小さな秋 ●バスついでいな ●うたえバンバン ●どんぐり ●ころころ ●まつぼっくり ●生活発表会用の歌指導 	<ul style="list-style-type: none"> ●おぼろぎ ●おじいちゃん ●おばあちゃん ●こどもの世界 ●友達讃歌 	<ul style="list-style-type: none"> ●みんなでつくろう ●七夕さま ●パンダグダバヤ
<ul style="list-style-type: none"> ●たのしいオーガスチン 	<ul style="list-style-type: none"> ●ヘーイ ●タンプリン 		<ul style="list-style-type: none"> ●こおろぎ ●ハイホー ●(カスター) 	
<ul style="list-style-type: none"> ●キラキラ星 (ピアノ・木琴) 	<ul style="list-style-type: none"> ●おもちゃのチャチャチャ 	<ul style="list-style-type: none"> ●キャベツの おやま 	<ul style="list-style-type: none"> ●ミッキーマウス 	
<ul style="list-style-type: none"> ●大工さんの金づち ●むつくり熊さん ●キャベツを植えよう 	<ul style="list-style-type: none"> ●カーラス・カズ ●ノコにしんの子 			
<ul style="list-style-type: none"> ●あぶくたつた ●かごめかごめ ●はないちもんめ 		<ul style="list-style-type: none"> ●はないちもんめ ●あぶくたつた ●にえたつた ●だるまさんがころんだ 		
	<ul style="list-style-type: none"> ●キャンデー ●ワルツ 		<ul style="list-style-type: none"> ●クリミーマミ ●動物体操 ●野外劇用ダンス ●大きく小さく ●ハイホー ●友達讃歌 ●ラッキーセブン 	<ul style="list-style-type: none"> ●盆おどり ●年少大漁節 ●くまちゃん音頭 ●ドラエモン音頭
<ul style="list-style-type: none"> ●生活発表会のおどり ●花のおどり ●姫のおどり ●フォークダンス 	<ul style="list-style-type: none"> ●田んぼの中の1けんや 		<ul style="list-style-type: none"> ●クリミーマミ ●動物体操 ●白ゆきひめ ●花の精 ●まほうつかい ●王子 ●フォークダンス 	
<ul style="list-style-type: none"> ●こんべさんの赤ちゃん 		<ul style="list-style-type: none"> ●やさしいやさしいもグーチーパー 		
<ul style="list-style-type: none"> ●こんべさんの赤ちゃん 	<ul style="list-style-type: none"> ●おろかものうた ●お寺のおしょうさん 			

導入部：こいのぼりを庭にあげた時、その下で見上げながら教師が歌う

← (二・三日くり返す)

一斉活動として：「みんなにこいのぼりの歌を教えてくださいようか」一番をゆっくり二回教師が歌う

←

伴奏なし：子どもも一節ずつ言葉をはさみながら歌う

← (三・四日くり返す)

教師のピアノの伴奏に合わせて歌う

事例3 レコードから歌を覚える。年少「みんなの世界」

食事の時間に「みんなの世界」のテープをかけておく。自然に子ども達が口ずさめるようになる。だいたいみんながわかるようになってから、教師のピアノに合わせて歌う。

事例4 踊りを通してレコードの歌を覚える。年長「キャンディーキャンディー」

運動会の野外劇に選曲した歌をかけて四日ぐらい練習

しているうちに踊りと一緒に歌を覚え、踊りながら歌い、又踊った後歩きながら自然に口ずさんでいる。

事例5 遊びの中で、その場に合った歌を、先生がどん

どん歌って聞かせる。

遊びの中でその場、その場で歌の時間と限らず歌う。

粘土を作っている時、象の鼻を作っている子がいれば

「象さん」の歌、カエルをとりに行った時には、「カエル」の歌、七夕飾りを作りながら、「七夕」や「星」

の歌を先生が口ずさむ。

△考察▽ 事例1は伝統的な歌の教え方としてごく普通のものである。日本では歌の指導はピアノの伴奏と密接にくっついている。近代音楽教育が明治時代に外来の輸入文化として入り、その導入時に歌はピアノ伴奏と一緒に入ってきた事と無関係ではない。ピアノの伴奏をつけて歌を教えようと思うと自由形態の指導はやりにくい。一つはピアノが大きくて子どもの方を向いては使えない楽器であり他の一つの理由はピアノの音が大きくてクラス中に響きわたるせいでもある。さま

さまざまな活動が自由選択活動になっても歌の指導だけが一斉形態の活動として残ってきた理由の一つである。時にはあまり歌いたくない子どもが集められて歌わされるためにどなり声やわざとふざけて歌う子が出てくる。椅子に座らされ義務として歌わされるのではなく、できるだけ楽しいものとして歌を経験させたいものである。

事例2、3では、レコードであれ、教師の声であれ、教えようとする前に十分歌になじませておいて、教師が伴奏をつける段階では、子どもは、歌詞も自然に覚えほとんど歌えるようになっていく為、不安が少なく自信をもって歌うことを楽しめる。

事例4から、歌は体を通しリズムを感じながらごく自然に覚えることがわかる。遊びの中で口ずさんでいる歌は、ペガサス、キャンディーキャンディー、ロックスロールなど、レコードから覚えた歌が多い。

子どもに、歌を教えるとか、音楽的環境をつくるのは、レコードもよいが本来は折々に教師が生の声で歌

いかけるのが望ましいことかも知れない。(事例5)

歌の指導がピアノの伴奏をひきずっているが故に生活の中にとけこみにくかったことを考えると、幼稚園における歌の指導は、ピアノに固執せずにもっと子どもの方に顔を向けながら、生の声で又はレコードやテープを上手に使用して子どもと一緒に歌ったり体を動かして踊ったりしながら、歌うことを共に楽しむことが大切だと思われる。

このことにより音楽は、教師主導の一斉活動から、自由な活動として子どもにも選択できる活動となる。

2 楽器

(1)種類と傾向

幼稚園で子どもが用いる楽器は、主としてカスタネット、スズ、タンブリン、トライアングル等の打楽器を中心としたものである。これらの楽器は、教師側の管理上の都合から、即ち自由に使用させてこわされては困るか、やたらに鳴らされるとうるさいなどの点から、従来

選択活動として与えにくい活動になっていた。しかしクラス毎に子どもに扱える教材として楽器を与え、テープレコーダーを自由に操作させることにより、楽器も、子どもたちでテープをまわして自由に打って遊べる活動になってきている。使用する曲は「ヘイ！タンブリン」「大きなたいこ・小さなたいこ」「おんまはみんな」など、リズムのはっきりした曲が用いられている。

(2) 指導方法

事例 6 カスタネットとの出会い。年少 5月「おもちゃのチャチャチャ」

カスタネットを朝目につくところにおいておく。見つけたK男が「なんだこれ？」カスタをぶらぶらさせて音を出して見る。頭にぶついたり、二個持ってガチャガチャしている子どももいる。大よろこびで、ガチャガチャ鳴らして歩きまわる子。初めて見た子、姉兄が持つて知っている子等それぞれのそなえによってちがってくる。教師は一段落したところでカセットテープをかける。(おもちゃのチャチャチャ)五回くり返

したあと教師が先頭になってカスタネットを鳴らしながら行進した。

事例 7 カスタネットを指導する。年少 6月「キラキラ星」

自由打ちを何度か経験した後全員でカスタネットを使う経験を持たせる。全員一斉活動

(ア)カスタネットの正しい持ち方、打ち方の指導

赤い方を手のひらにつけること。中指にゴムをかけること。打つ時は軽く打つこと。

(イ)教師のリズムをまねして打つ。

教師ターンターンタンタンタン、子ども同じに打つ。

(ウ)「手をたたきましよう」の擬似音のところを打つてみる。キラキラ星のリズム打ち。

(エ)楽器の扱い方を知らせる。大切にする。投げない。

事例 8 ピアノと木琴で合奏する。年長 12月「キラキラ星」

朝、木琴を机の上に出しておく、女兒四名が木琴をたたき、いろいろな音を出していたが、キラキラ星

をひく子がでると、他の子どもみんなキラキラ星をたたく。ピアノはF子がひいて、自然に合奏ができた。全員ピアノを習っている子どもたちである。ドレミのわからぬM子には、教師がシールをはって目じるしをつけ、教えるとき意欲的に取りくんだ。

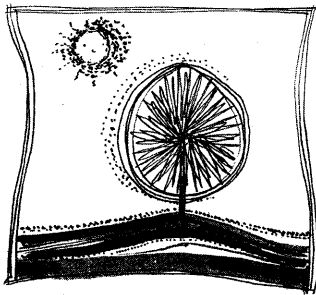
△考察▽ 楽器は、特に年少の子どもにとっては、音の出るおもちゃとしてとらえられる。「これは一体何であるか」という感じであらう。体のおちこちによつてみたりする。(事例6) 音が出るのでうるさくなる。レコードをかけることよってリズムをすることの楽しさがわかり、しだいにそろって打つことによるこびを感じるようになる。(事例6) 教師の側としては、(事例7)に見られるとおり扱い方や打ち方について、ひととおりの知識を与えることも管理上必要であるし又そろってすることの快感を経験させることができる。

けん盤楽器は、一般に幼児には向かないものであるが、家庭でピアノを習っている子どもたちにとって

は、抵抗なく楽しめる楽器になっていることがわかる。無理に教え込むとか練習させるのでなければ、年の12月ごろには合奏として楽しめることがわかる。曲としてはいずれも、知っている曲、リズムのはっきりした曲を打っている。(キラキラ星)分担奏は、生活発表会などに度々行なわれているが、年長児でもかなり教師の指導が必要であり、待ったり注意されることの多い活動である。

— つづく —

(つくば市立桜南幼稚園)



君は変な顔をしていた。啓吾と私ではJ君との関係が違うのだから、同じことを言っても土台無理な話だとは思ふ。この時も相変わらず彼は泣き続け、私の方も「そうだよねー」などと妙に納得したりして……そしていつの間にか彼も遊び出したと記憶している。J君と啓吾にとって、その時期「ウンチ！」が気分を変える（通じ合ひ思わず笑ってしまう）魔法の呪文だったのだと思う。

その日から私は、魔法の呪文探しに夢中。誰かさんと私の間の魔法の呪文を、いつ、どうやってみつけていくか……。そう考えると、少しすねたように泣いてみせるあの子どもこの子も、謎解きのような面白さに満ちてくる。

以下、家庭や、職場（幼稚園）でみつけたいろんな呪文をおしらせしたいと思う。

△家庭にて▽

チキンバーで大笑い

——下の息子（耕太）が五か月ころのこと。団地の郵便受けのところ、近所に住んでいるO君に会う。O君が勢いよくセイントセイヤの歌を歌うと、はじめてと言え程に笑いこぼれる。それからしばらくO君は、耕太に会うたびにセイントセイヤを歌ってくれた。——

——耕太が泣き出してしようがなくなり、「おにいちゃん、なんとかして！」と頼まれた啓吾。耕太のそばに行き、しゃがみこんで顔をくっつけて「こうたん！チキンバー——！」と言う。「これ言うとき笑うんだもんねー」と言う。——

兄弟ができ、又近所づきあいも広がり、赤ちゃんのいる生活も、ずいぶん一人目の時とは違ってきている。啓吾の時にはいなかった人（特に子ども）が周囲にたくさんいる。そして、その人達は、みんなそれぞれの面白さで迫ってくるように思う。そして赤ちゃんである耕太は、面白さに対してかなり敏感に反応しているように思う。

赤ちゃんの笑顔が文句なく可愛いから、人は誰でも

赤ちゃんを笑わせてみたいな、と思う。何かをした時に、偶然にも赤ちゃんが笑ったりすると、O君や啓吾のよう「くすると笑うんだよね」という風に理解し何回でもやってみようとする。そして時には、気分を変えるために言ってみる。

「チキンバー——！」と。

虫がいないかな。

——啓吾が四才のころ。数組の家族で散歩していると、「くくがいないからいやだ」「くくしたいのに」という風にゴネてばかりいた一時期があった。「あー、はやく春がくるといいね、虫がいれば気分が変えられるものね」と言われ、春をじーっと待っていた。——

——耕太はオムツの取り替えをいやがる。朝保育園に連れていく父親にとって、これは大変なできごと。そこでオムツを取り替えたい時には、洗面所の水道を細く出しておくことにする。すると耕太は、その水をいたずらすることに夢中になり、そうこうしている間にオムツを取り替えるという必殺技を、父親は常用している。——

ゴネたり、スネたりしている時は、自分の中が自分の力ではどうしようもないかんにゴチャゴチャになっている時だと思う。

そんな時は、怒ったり論じたりしてもあまり効果はない。かえていらだちを増してしまいかねない。それよりも、何か気分を変えられるものをみつけることの方が有効だ。

啓吾の場合は虫だったし、耕太の場合は水だった。どちらも自然物であり生命をもっている。何か自分の意志で動いているようなところがあって、思わずひきこまれてしまう感じがする。思わずひきこまれ、ふと気づくと気分が変わっている、というかんじ。

笑ったり、好きな物をみつけたりすることで気分を変えていく我が子をじっくりとみながら、子どもも結構大変なんだな、でもこうやってどうにもならない自分というものときあったり、気分を直しすがすがしくなる、という経験を積み重ねながら、少しずつ少しずつ育って

いくのだな、と思わされた。

△幼稚園にて▽

モルモットをだいて……

——園庭にいとK君が口をとがらせてやってくる。

「もー、U君達僕を入れてくれないんだよ。僕仲間だったのに！」

U君R君の二人は朝から廊下の大きな壁面のところに陣取り、自分達の冒険の地図の続きをかいては貼っていくことに熱中していたのだ。数週間も続いているこの遊びにK君は仲間入りしている時もあつた。それだけに、K君の不満も理解でき、一緒にU君達のところへ行ってみることにした。

「U君達、K君が入れてくれないって、悲しそうに言っているんだけど……」

と話しかけてみる。するとU君達は顔を上げ、

「だってK君たら、変なの、とか言うんだもん。だから入れてあげないんだ。」

という返事。もうおへソが曲り出したK君は、

「変なのって言わないよね」と私が言葉をそえても、プン！と横をむいている。

「それじゃあだめだ。先生と遊ぶしかない。」とK君を連れ、園庭に戻る。K君はプンプンしてる。(どうしようかなー)と私は内心思いながら、何気なく、

「モルちゃんの家をきれいにしてあげよう。」とつぶやき、そうじをはじめ。K君は私にくっついていたので必然的にモルモットに目が行く。

「モルちゃん赤ちゃんだこうかな。」

そう言いながら、かわいい赤ちゃんを抱きあげたK君。心なしか表情がやわらいだようにみえる。しばらくして気づくと、K君がいない。近くにいたHちゃん達に、

「あらっK君どこに行ったんだらう。みてきてくれる？」

と頼むと、部屋の中を見回し廊下の方へ行く。そして戻ってきて、

「K君ね、モルちゃんだいて、U君達のそばで立ってみ

てたよ。」

と教えてくれた。

(四歳児二月)——

自分の思い通りにならないと、人をたたいたりけとばしたりすることもあるK君。意志が強く、不満を持ちだすと不満のかたまりになって爆発してしまふタイプ。四月に入園して以来、一緒に楽しく遊んだり夢中になって虫を追いかけたりしてきたけれど、ひとたびトラブルがおこると、どうしても長く尾をひいてしまい、やつあたりで泣かされる事も少なくない状態だった。

そのK君が、一度拒否されたところへ自分から出向き、じーっと入れてくれるのを待てるようになったのは、大きな成長だと思えた。まだ自分から言い出すには至っていないかったようで、しばらくK君は立ったままだった。私が近づき、

「K君、変なのって言わないならいいんだよって、U君達は言ってるのよ。K君は変なの、なんてもう言わないんじゃないの。」

と話しかけると、コクン、とうなずいた。それならば、

ということ、もう一度私と一緒に、U君達のところへ行き、頼むと、今度はすんなり入れてもらった。その時のK君の笑顔。それはすがすがしい笑顔だった。

K君はどうして気分を変えることができたのだろうか。それはモルモットの赤ちゃんを抱いた時に、暖かさや安らぎ、楽しい時の気持がK君の中によみがえったのではないかと思う。そして、暖かくかわいいモルちゃんを抱きながらなら、もう一度U君達のところへ行ってみようかな、という気持になることができたのだろう。

K君はもう、自分の力で気分を変えられるようになってきている。K君をあと押ししているのは、楽しく遊んだ記憶や仲良しの友達なのだと思う。

一度はゴネてみて、しばらくしてから仲間入りする、という行動は、大人から見ると、なんて回り道なことを……と思われるけれど、回り道なしに今のK君はありえない。いや、これは回り道ではないのだろう。ひたすらに歩む大切な道なのだろう、と思った。

特別バッチは約束バッチ

——「僕の誕生日がこない！」

そう言つてY君が泣きだした。七月の誕生会で。Y君は三月生まれ。でもしっかりしたところもある男の子。泣き出したY君の音がホールに響きわたる。どうしよう。なんと言つても泣き止まない。とうとうホールのカーテンの中にもぐりこんでしまった。

「だつてずるい。Aちゃん達（七月生まれの子）ばっかりバッチもらつてる！」

と泣きながら言う。バッチというのは私の作ったもので、

「先生からのプレゼントよ」

と渡したものだ。Y君も三月になればもらえるのだけれど、今はまだない。

困っている私をみてS先生が小声で言った。

「何か、代わりのものはないの？」

「えっ!？」

「Y君はバッチが欲しいんでしょ。何か代わりになるものはない？」

そう言われて私は迷った。けれど、とにかく捜してみようと部屋へ走り引き出しの中身をみた。ビー玉、おはじき……あつたあつた！紙粘土で作った玉があつた！それをモールでつないでサクランボのようなバッチができた。ホールに戻るとS先生が私の方をみてきた。

「あつたの？」「気に入るそう？」

気に入るかどうか定かではなかったけれど、意を決してカーテンのうしろにかくれているY君のところへ行く。

「ねえY君、Y君の誕生日もきつと来るよ。その時には、Aちゃん達みたいなバッチをあげるからね。今日は代わりに約束バッチをあげるね。」

するとY君は、ピタリと泣き止んだ。胸にそのバッチをつけ、彼はみんなの所へ戻っていった。他の子ども達は司会の先生の話に引き込まれていてY君の方をふり向きもしなかった。

Y君と私の、それは秘密の「時」だった。誕生会に参加しながら、時々Y君は胸のバッチを触る。何かを確かめるように、彼はバッチを触っていた。

次の誕生会の時、彼はややさめたような落ち着いた声で、八月生まれの友達の胸のバッチをみながら言った。

「いいねえ。たんじょう日がきて。」（四歳児七月）――

「何かかわりものはないの?」

というS先生の一声をきいて、私は一瞬ひるんでいた。

その時、私の頭の中をよぎったのは、

1、Y君だけバッチをもらったら、他の子が「ずるい」というのではないか。

2、Y君を甘やかすことになるのではないか。

という懸念だったのだと思う。そして、それは全くの杞憂に終わった。他の子ども達は何も言わなかったし、Y君もその後少しも甘えん坊に（もともと以上には）なっていない。

私が抱いた懸念をS先生に話すと彼女は笑ってこたえてくれた。

「子どもってそういうものよ。他の子は我慢できているけれど、Y君は今それが我慢できない。誕生会のおもしろさの方にひかれている子ども達は、ずるいって言った

りはしないのよ。夢中な時は気づかない。Y君も頭ではわかっているのよね。でも今はどうしてもバッチが欲しくなっちゃった。わかっているだけに理屈で言ってもダメなのよ。そういう時は、何か代わるものがあれば納得できる。そうやってだんだん大きくなるのよ」S先生の話をききながら、私は何度も何度もうなずき、そして、我が子に接し、地域の子に接し、幼稚園の子に接しながらも、まだまだ子どもを十分に理解していない自分に気づいたりした。

Y君にとって、乗り越えられなくなってしまった「誕生バッチ」を、「約束バッチ」を手に入れることによって乗り越えた時（バッチが胸についたことをきっかけとして自分で気持ちを変えたことにより）彼は自分で自分の胸に、目に見えないもう一つの輝くバッチをつけたのではないか……と思う。

家庭でのこと、幼稚園でのことをふり返りながら、「気分を変える」ということについて考えてきた。

家庭生活においては、子どもがスネたりゴネたりする姿は、ほとんど日常茶飯事である。生活というのは、修羅場であるわけだから。だから、気を取り直すような工夫をあれこれしてみたり、いわゆるなだめたりすかししたりといった行為もほとんど無意識のうちに行っている。

ところがいざ幼稚園という場になると、一つ一つの行為が「教育的にみてどうか」という風に気になりだす。だから、「パッチがほしいよー」と言って泣くY君に対しても、まず「我慢」という文字がうかんできてしまい、「ほしいのか。よし、よし。」とよりそう気持は出にくくなってしまふ。

私は、そうだった。

けれど、いくつかの印象的な体験を、たまたま担任クラスの対象年令と我が子の年令が同じだったことにより、私の中の妙なこだわりが、少しずつ薄らいできているように思う。

子どもが気分を変える時（気持を取り直す時）、それは、何かを乗り越えた時だともいえる。何かを乗り越え

る姿は美しい。けれど乗り越えることを迫ったり、一つの型として追い込みすぎたりすると、不本意ながら乗り越えてしまったり、挫折してしまいかねない。子どもの心に添い、自らを育てる力を信じ、なにやかやとかかわりつつゆっくり過ぎず時、子どもは自分のペースで、ひそやかに、そしてあざやかに乗り越えていくのではないかと私は思う。

なにやかやとかかわるコツを、我が子にかかわりながら教えてもらうことにしよう……。

あせて原稿を書いている私の向こう側で、息子達が笑いこぼしている。おもちゃのコインを耳にはめたり鼻にはさんだりする兄をみて、弟が手をたたくて笑っている。僕もやる！とせがんでいる。日常はめちゃくちやのようで味わい深い。

さ！、書き終わった。私もペンを置きコインを耳にはめて一緒に笑ってこよう。きつと気分が変わるから。

津守真先生には毎号、心に響くお話を書いていただいています。先日、本誌でおなじみの「はるにれの会」の講演会に参加して、十七年ぶりに先生のお話を伺いました。最後に、参加者の発言へのコメントの中で、保育者として自分が保育したことは、果して良かったのだろうか、と思う時があるが、そんな時は、出合いの中で最善を尽くすことが大切になる。又、教育は制度にとらわれず、人間を育てることを基本に、やってほしい。これは一人一人の教師の中の問題です。と言われたことが心に残っています。

夏になると、以前勤めていた学童保育クラブでの、あるお弁当のことを思い出します。夏休みのある日、M君がお弁当に「おそうめん」を持ってきました。毎日暑いので、お母さんは、子どもに涼しいお昼を、と考えたのでしょう。最近はい密封容器のお弁当箱が種々あるので、こんな水ものも、お弁当に持ってこられる

のです。そのおそうめんのお弁当を見て、持ってきた本人よりも、まわりの子ども達の方がびっくりしたりうらやましがったり。まさか、おそうめんをお弁当に持ってくるなんて!!

「ねえ、ぼくのお弁当、少しあげるからおそうめんたべさせて!!」

同じテーブルにすわった七・八人の子ども達は、みんなでつゆの入ったコップをまわしあって、M君と一緒におそうめんを全部たべてしまいました。もちろん、自分たちのお弁当もわけあって食べました。その時の子ども達のうれしそうな顔、忘れられません。

友だちと一緒に食べるだけでなく、一つ釜の飯ならぬ、一つコップのそうめんをみんなで分けあってたべた、それだけで楽しさも増し、彼らのつながりは強くなったようなお弁当の時間でした。

最近、本誌好評のため、手に入りにくく、御不便をおかけしております。(K)

幼児の教育 第八十八巻 第七号

七月号 ©

定価四一〇円(本体三九八円)

平成元年 六月二十五日 印刷

平成元年 七月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

TEL・二九二一七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

これからの「子育て」



21世紀の子育てに関する小論文で母親、幼児教育関係者、教員、学者、ジャーナリストなどいろいろな立場からの子育てに関する意見をまとめています。日頃子育てに関して悩みをもつ母親や保育者などはもちろん幅広い子どもに関する勉強をしたい方々には大変参考になる子育て論、一家に一冊、一園に一冊をおいておきたい書です。

全日私幼
主権の
「21世紀をめざす
子育て国際会議」の
子育て小論文
コンクール
受賞
作品集。

全日本私立幼稚園連合会編

B6変型判・264頁

定価1,200円(本体1,165円)

INFANTOPIA88 「子育て小論文コンクール」

- ・テーマ 「これからの子育てを考える」
- ・募集締切 昭和65年6月10日 (朝日新聞紙上等を通じて全国に告知)
- ・応募総数 920点
- ・制限字数 400字語原稿用紙10~20枚
- ・審査員 河野重男 (お茶の水女子大教授 エッセイスト)
- 毛利子美 (共立女子大教授 エッセイスト)
- 水村治美 (朝日新聞学芸部編集委員)
- 佐藤祥子 (朝日新聞学芸部編集委員)
- 今藤良政 (INFANTOPIA 実行委員長、全日私幼連合会長)
- 平野文子 (全日本私立幼稚園 PTA 連合会常任委員長)
- ・選考経過 6月15日 第1次予備審査 候補作60点を選考
- 6月16日 第2次予備審査 候補作24点を選考
- 6月27日 第3次予備審査 最終候補作18点を選考
- 7月8日 最終審査会 入選作8点を選考決定
- (入選作氏名) 杉野文栄 (東京) 高校教師
- ・最優秀作 (賞金50万円) 若田英俊 (兵庫) 主婦
- ・優秀作 (賞金20万円) 岩岡 佳 (静岡) 学生
- ・佳作 (賞金5万円) 瀬口純子 (東京) 会社員
- 土山忠子 (大阪) 教師
- 藤田元次 (盛岡) 公務員
- 依田啓子 (東京) 主婦
- 高木桂子 (東京) 主婦
- (入選外最終候補作) 加藤宣彦 (東京) 宮治 真 (愛知)
- 中村正子 (東京) 後藤嘉代 (東京) 佐々木三津江 (大阪)
- 水沼安美 (群馬) 豊岡正明 (兵庫) 東 朋子 (京都)
- 鈴木由美 (栃木)
- 比 久子 (東京)



実践に役立つ
三大特長

遊びを育てる 指導計画作成資料集

1. 月別子どもの姿の実例に指導のポイントが付記されていて0～2歳児の発達段階がわかり、保育のめやすがつけやすい。
2. 子どもの生活を中心にした年間指導計画案は、保育計画の見直しに役立つ。
3. 子どもが喜ぶ遊びの実例が豊富で活動を発展させるのに役立つ。

子どもの遊びと
指導のポイント①

0歳児の保育

第1章は、月別に実践例をとりあげ、それぞれの月の保育のポイントを付記して、指導の流れがつかめるようになっています。第2章は、4月に同時に入園してきた三か月齢児と九か月齢児の事例を並記して、その発達段階の差による保育内容のちがいを明らかにしています。

子どもの遊びと
指導のポイント②

1歳児の保育

1歳児は、一生の中で母親を最も必要とする時期です。集団生活を求めない1歳児に対して、子どもの心を大切に作る保育の実践例をまとめました。1章・2章には月別の子どもの遊びの変化をとりあげ、指導のポイントを付記しました。子どもの発達を正しく理解することができ、探索活動を生かした指導計画作成に役立ちます。

子どもの遊びと
指導のポイント③

2歳児の保育

第1章は、子どもの姿と指導のポイントを並記して、子どもの生活がよくわかり、指導の手がかりがつかめるようになっています。2章では、年間指導計画や月案例などを紹介し、子どもが遊び込める指導計画づくりに役立ちます。3章は、子どもの遊び方の図解、4章は、たくさんの実践例を紹介しています。

保育が変わると子どもが変わる!!
本吉圓子「生き、生き、保育」の真髄
あせらないで待つ保育、つまずかせて学ばせる体験保育、子どもと保育者との一対一の保育、遊びの大切さを保育の信条とした本吉圓子保育の長年の実践を年齢別三分冊にまとめた保育関係者の必読書!

本吉圓子 編著

0歳児の保育(228頁)・1歳児の保育(228頁)・2歳児の保育(232頁)

B5判・各定価2,060円(本体各2,000円)・セット定価6,180円(本体6,000円)